

## 鎌倉真言派の成立

——文覚・性我・走湯山——

平 雅 行

### はじめに

本稿は、源頼朝と主従関係をむすんだ真言僧徒の事蹟を明らかにすることを目的とする。東国鎌倉の仏教をめぐる筆者の研究は、鎌倉幕府の宗教政策の実態とその歴史の変遷を説明することを最終目標としているが、その際、私は、鎌倉で活動した個々の僧侶の事蹟を復元することによって、その史料制約を突破しようと考えた。ここに、この研究の方法的特徴がある。すでに私は、鎌倉山門派・鎌倉寺門派の成立・展開過程について検討を終え、鎌倉真言派についても、何篇かの論考を発表してきた。<sup>(1)</sup>

鎌倉初期の真言系幕府僧の実態を解明するには、諸寺別当クラスの僧侶から検討するのが自然な順序だろう。前稿で私は、日光山別当寛伝の事蹟を考察したが、本稿では勝長寿院・永福寺と関わりの深い文覚・性我をと

りあげ、さらに走湯山の検討へと向かいたい。

## 第一章 文覚と源頼朝

文覚の弟子である性我は勝長寿院と永福寺の別当に任じられた。「永福寺別当次第」は文覚を最初の別当とし、性我を二代目としているが、文覚が永福寺別当に任じられたかどうかは検討を要する。とはいえ、文覚が源頼朝から重用されたことは確かである。しかも、勝長寿院と永福寺別当であった性我は、文覚の分身的存在であった。そこで本章では文覚について検討し、そのうえで第二章で性我を取り上げることにしたい。文覚についての論考は数多く論点も多岐にわたるが、本稿では、(ア)文覚の受法・祈禱と、(イ)神護寺復興と寿永二年十月宣旨、(ウ)東寺など顕密寺院の修造事業を中心に検討したい。文覚の永福寺別当職については、次章で取り上げることにする。

文覚(一一三九―一二〇三)は『平家物語』ですでに伝説化されており、その実像を探るのは容易でない<sup>(3)</sup>。とはいえ、千葉胤頼とのつながりからして、文覚が渡辺党の出身で上西門院に仕えていたことは事実とみてよい。そして時期も事情も不明であるが、のちに文覚は出家した。ただし、文覚が東大寺・延暦寺戒壇で受戒した記事を確認することができない。遁世の聖と考えるべきだろう。仁安三年(一一六八)に神護寺に参詣してその荒廃ぶりに驚き、堂舎の造営に着手するが(元暦二年正月十九日「後白河法皇手印文覚起請」、以下「文覚起請」と略記<sup>(4)</sup>)、文覚の立場はあくまで神護寺外部の勸進聖であって、神護寺の寺僧になったわけではない。

さて、(ア)文覚の受法・祈禱についてであるが、文覚は養和二年(一一八二)四月、江之島に大弁才天を勧請し、三七ヶ日の間、断食して供養法を行った。源頼朝の要請で奥州藤原氏を調伏したのだ。<sup>(5)</sup> 文覚の祈禱として確認できるのはこれが唯一であるが、わずかとはいえ、文覚は密教修法を勤仕している。ただし、文覚が誰から密教を学んだのかについては定かでない。『伝燈広録』は勧修寺興然の付法として、行慈・明恵・荣然・文覚の四名を挙げ、「勧修寺慈尊院次第」も明恵・行慈・文覚を興然の付法弟子とする。<sup>(6)</sup> とはいえ、この二点の史料はいずれも近世の成立である。信憑性が高いとはいえず、慎重な取り扱いが必要であろう。

師とされた興然(一一二〇―一二〇三)について瞥見しておく、彼は勧修寺慈尊院の第二世である。理明房と号し智海ともいった。幼くして勧修寺の寛信に学び、仁平三年(一一五三)に念範より伝法灌頂をうけ、その後も実任・亮恵など多くの僧から受法している。図像や儀軌に通じた碩学であったため、数多くの弟子をもち活動期間も長い、出自に問題があったのか、僧綱位に昇ることなく阿闍梨・大法師位で終わった。『五十巻抄』『金剛界抄』や『図像集』などの著があり、弟子には『覚禅鈔』の覚禅が<sup>(7)</sup>いる。

ここで注目すべきは明恵である。先の史料は、文覚とともに明恵を興然の付法としており、明恵―興然関係は、文覚―興然関係を考えるうえで参考になるはずだ。そこでまず、より信頼性の高い血脈史料をもとに、興然の付法を確認しておこう。醍醐寺本『伝法灌頂師資相承血脈』と『真言付法本朝血脈』は、いずれも興然の付法として覚禅・行慈・成宝・寛典・荣然・光宝・尊雲・性我など三十一名を挙げるが、そこに文覚・明恵の名はみえない。東寺観智院金剛藏『真言付法血脈図』は三〇名の灌頂資を掲げているが、そこにも文覚・明恵の名はみえない。また、『血脈類集記』は成宝・行慈・寛典・覚禅・荣然・光宝ら一二名を興然の付法とするが、

やはり文覚・明恵の名は確認できない。<sup>(8)</sup> 明恵・文覚が、興然より伝法灌頂をうけていないのは事実とみてよからう。

ところが明恵の漢文行状によれば、「生季<sup>(一九一一年)</sup>十九歳、就<sup>三</sup>興然阿闍梨、伝<sup>三</sup>受金剛界」(胎藏・護摩同受<sup>三</sup>此師<sup>二</sup>)とあるし、高山寺蔵の「勸修寺流血脈」も興然の付法として明恵を掲げている。さらに「却温神呪經口伝」等の奥書は、

予、先年比<sup>(一九三)</sup>〈建久四年正月十四日〉奉<sup>レ</sup>対<sup>三</sup>勸修寺理明房<sup>一</sup>、受<sup>三</sup>此經法<sup>一</sup>、披<sup>三</sup>彼折紙<sup>一</sup>、無<sup>二</sup>此沙汰<sup>一</sup>、於<sup>レ</sup>是發心  
率爾勘<sup>三</sup>定之<sup>一</sup>、見苦、く 金剛仏子高弁記<sup>(明恵)</sup>之

と記している。<sup>(9)</sup> 明恵の関心が密教から華嚴に移ったため、伝法灌頂には至らなかったが、明恵が興然から受法していたのは明らかである。明恵の事例を参考にすれば、文覚もまた興然から密教を学んだと考えてよからう。ただし、『愚管抄』は文覚を「行ハアレド学ハナキ上人」と評している。<sup>(10)</sup> 興然に師事したが、伝法灌頂までの修学に堪えられずに放り出したのであろう。或いはまた、神護寺再興の勧進活動が、修学を妨げたとも考えられる。文覚は結局、誰からも伝法灌頂を受けることなく終わった。「永福寺別当次第」は「性我」<sup>(性我<sup>東</sup>寺<sup>醍</sup>)</sup>「慶幸」<sup>(慶幸<sup>山</sup>)</sup>「良瑜」<sup>(良瑜<sup>山</sup>)</sup>のように別当の出身宗派を右肩に注記しているが、文覚についてはその記載がない。しかも、文覚の弟子である行慈・性我は、いずれも文覚以外の人物から伝法灌頂を受けている。これらの事実も、文覚が伝法灌頂を受けなかった傍証となろう。

ちなみに『平家物語』は文覚について、

那智に千日こもり、大峰三度、葛城二度、高野・粉河・金峰山、白山・立山・富士の嵩、伊豆・箱根・信

乃戸隠・出羽羽黒、すべて日本国残る所なく、おこなひまはッて、(中略)とぶ鳥も祈落す程のやいばの驗者とぞきこえし、

と述べている。一方、『梁塵秘抄』は

聖の住所は何処くぞ、大峰・葛城・石の槌、箕面よ勝尾よ、播磨の書写の山、南は熊野の那智新宮、<sup>(12)</sup>という。文覚の苛烈な断食行や、「行ハアレド学ハナキ上人」「天狗ヲマツル」などの評を思えば、<sup>(13)</sup>文覚は山岳修行の驗者としての性格が強い。つまり文覚は出家後も顕密僧になることなく遁世の聖を通したし、興然などに師事したが、伝法灌頂に至ることなく、修驗の聖として活動したのである。とはいえ、源頼朝は初期の段階で文覚に祈禱を一度依頼したが、その後は勤修させていない。頼朝が文覚に期待したのは、むしろ別のところにあった。

そこで、(イ)神護寺復興と寿永二年十月宣旨の問題に移ろう。文覚は仁安三年(一一六八)神護寺の荒廃ぶりに衝撃をうけ、やがて神護寺に住み着いて金堂・納涼殿・護摩堂などを造営した。しかし、本格的な復興のためには朝廷の支援が不可欠である。そう考えて文覚は、承安三年(一二七三)の夏、神護寺再興のため莊園を寄進するよう、後白河院に強請した。それがあまりに無礼で強引であったため、文覚は捕らえられて伊豆に流罪となる。五年後に赦免され、寿永元年(一一八二)に再び後白河に莊園寄進を求めた。すると後白河院は一転してそれを認めたという(「文覚起請」)。後白河はなぜ態度を翻して莊園寄進を約したのか。その答えは、文覚と源頼朝との深いつながりにある。

文覚は流罪先の伊豆国で、同じく流罪中であった源頼朝と知り合った。『愚管抄』によれば、文覚は「アサ<sup>(朝)</sup>

タニユキアイテ、仏法ヲ信ズベキヤウ、王法ヲオモクマモリタテマツルベキヤウナド」を頼朝に説き、頼朝も、再び世に出ることがあれば支援しよう、と語り合っていた。また『吾妻鏡』によれば、千葉胤頼は上西門院に仕えていた馴染みで文覚と親しく、「文学<sup>(寛)</sup>在伊豆国時、令同心、有示申于二品<sup>(源頼朝)</sup>之旨、遂举義兵<sup>(給)</sup>」と、文覚と胤頼が流罪中の頼朝に挙兵を勧めていたという。<sup>(14)</sup>どこまでリアリティーがあったかはともかくとして、文覚・千葉胤頼と源頼朝は、挙兵の夢を語り合った仲であった。そして治承二年(一一七八)五月に文覚は赦免されて神護寺に戻り、頼朝は二年後の治承四年八月に挙兵した。文覚はやがて頼朝と合流することになる。

さて、源頼朝と後白河院とは養和元年(一一八一)七月に初めて接触した。『玉葉』によれば、頼朝が内密に奏状を提出し、①自分は後白河院に敵対する意思がない、②昔のように源氏と平氏が並んで朝廷に仕え、関東は源氏に、海西は平氏に任せて内乱を収めるべきだ、と申し入れている。これは後白河院が平氏と共同統治を行っていた時期に当たるが、奏状の存在を知った平氏は、後白河に迫って頼朝追討を命じる宣旨を奥州藤原氏に下させた。一方、頼朝の方も以仁王を擁していると公言しており、反乱軍としての姿勢を崩していない。<sup>(15)</sup>だが、表向きとは別に、頼朝は後白河院との間で裏交渉を始めていた。

では、養和元年の交渉を仲介したのは誰なのか。「文覚起請」によれば、

配流之後、至<sup>(一七八年)</sup>于第六年「漸被<sup>(一七八年)</sup>免<sup>(一七八年)</sup>流罪、遂還<sup>(一七八年)</sup>住本寺、其間時々院參云々、還住之後至<sup>(一七八年)</sup>第五季(寿永元年)十一月廿一日蓮華王院御幸之時、進<sup>(一七八年)</sup>參御堂之内陣、」

とあり、文覚は治承二年(一一七八)の流罪赦免から寿永元年(一一八二)十一月までに「時々院參」していたという。このことからして、養和元年(一一八一)の仲介役が文覚であった可能性が高い。文覚は神護寺への莊園寄

進を名目にして、後白河院と接触していたのだ。

既述のように、文覚の頼朝帰参が確認できるのは養和二年四月の江ノ島での調伏祈禱である。しかし、挙兵の夢を語り合った千葉胤頼がいち早く挙兵に応じたことからすれば、文覚も挙兵間もない時期に、頼朝のもとに参じたはずである。養和元年七月に文覚は、頼朝と後白河院との仲介役をつとめたと考えてよからう。後白河院にとって文覚は、頼朝についての貴重な情報源であったし、文覚を介して頼朝と接触することは、政治的選択肢を増やすという点で意味があった。同じことは頼朝についても言えるだろう。文覚の活動によって頼朝は、後白河院との提携や平氏軍との和平策を、選択肢の一つとして持つことができたのだ。

その後、寿永二年（一一八三）七月に平氏が西走するまで、頼朝と後白河院との交渉は表だっては確認できないが、文覚は「時々院参」していた。そして、寿永元年十一月二十一日に蓮華王院に参上して、神護寺への莊園寄進を要請した。「文覚起請」は次のように記す。

（赦免五年目）

至第五季（寿永元年）十一月廿一日蓮華王院御幸之時、進参御堂之内陣、先年蒙流罪之時如令申上、  
為<sub>二</sub>当寺興隆、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>寄進莊園之旨、令<sub>二</sub>訴申<sub>一</sub>之处、即可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御裁許<sub>一</sub>之由、被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>畢、於是文覚流  
涙成<sub>レ</sub>悦罷出畢、次年（寿永二年）十月十八日、被<sub>レ</sub>寄進紀伊国<sub>二</sub><sub>一</sub>田庄畢、（中略）次年（寿永三年）前  
兵衛佐源朝臣頼朝、以<sub>二</sub>丹波国宇都郷<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>寄進<sub>二</sub>当寺伝法料<sub>一</sub>畢、同年五月十九日  
太上法皇以<sub>二</sub>吉富庄<sub>一</sub>、一円令<sub>レ</sub>寄進<sub>二</sub>当寺<sub>一</sub>御畢、

文覚と後白河院は蓮華王院の内陣で面談した。内陣が選ばれたということは、それが極秘の会談であったことを物語っている。文覚は神護寺への支援要請を名目にして後白河と接触し、そして後白河院は「即可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御裁

許」と莊園寄進を約束した。これを聞いて文覚は涙を流して感激しているが、それは大げさに過ぎよう。これは単なる口約束であって、実現性は限りなく低かった。

なぜ、そう考えるのか。一年後の寿永二年十月十八日に、後白河は約束を果たして莊園寄進を行ったが、それは頼朝との提携が実現した十月宣旨発布の四日後のことである。つまり後白河院は蓮華王院で、「文覚の尽力で将来的に源頼朝との提携が実現したなら、神護寺に莊園を寄進しよう」と述べたのだ。もちろん、後白河院は平氏を見限っていたわけではない。寿永元年十一月とは、後白河院が平氏と提携している時期であって、文覚との面談の四日前に朝廷は、源頼朝と通じた伊勢神宮の禰宜の処分を検討していた。<sup>(16)</sup>後白河は、みずからの政治的選択肢を担保するために文覚に口約束したが、それが実現される可能性はきわめて低かった。

ところが、面談から半年後に政治情勢が激変する。寿永二年五月、平氏は倶利伽羅峠の戦いで木曾義仲に大敗し、七月には西海に逃げ落ちた。代わって木曾義仲らの軍勢が入京したが、寄せ集めの混成軍団であったため統率が容易でなく、京都の混乱は収まるところか、治安が悪化する一方であった。そうした中で京では源頼朝に期待する声が高まり、後白河と頼朝は交渉を本格化させる。寿永二年九月二十五日、頼朝は文覚を都に派遣して、「義仲は平氏追討を怠り、京都を荒廃させている」と木曾義仲を譴責した。それに促されて義仲が播磨に進撃すると、その留守中の十月十四日に朝廷は十月宣旨を発布した。その内容は、東国の莊園・公領を元の莊園領主・国衙に回復させる一方、朝廷は源頼朝の東国行政権を容認するというものである。<sup>(17)</sup>反乱軍として登場した頼朝の軍事体制が、そのまま朝廷の政治システムに包摂された。双方にとって利のある提携であったが、これはまた朝廷・幕府ともに、その支配体制の在り方を変質させるものでもあった。



そして十月宣旨が出された四日後の十月十八日に、後白河院はかねてからの約束どおり、紀伊国<sup>かせだ</sup>持田庄を神護寺に寄進した。十月宣旨にいたる頼朝と後白河院との交渉で、文覚が大きな役割を果たしたのは疑いあるまい。そして翌寿永三年正月に木曾義仲が敗死し、二月に一谷合戦で平氏が敗退して軍事情勢が安定すると、四月・五月に源頼朝と後白河院が相次いで丹波国<sup>うづ</sup>宇都郷・吉富庄、備中国足守庄などを神護寺に寄進した（「文覚起請」）。神護寺への荘園寄進とは、朝廷・幕府の提携を実現させた文覚への報償に他ならない。こうして神護寺は、後白河院と源頼朝との協調関係を象徴する寺院となった。

次に、（ウ）東寺など顕密寺院の修造事業に話を移そう。神護寺の再建は文覚の個人的な願いに発するが、そのほかに文覚は、朝幕の要請で、文治五年（一一八九）末から建久九年（一一九八）にかけて、東寺修理奉行となつて金堂・講堂・鎮守八幡宮・五重塔などの堂塔とその仏像を修復した。また建久八年には西寺の塔の修復を進めているし、同年九月までに高野大塔の修築にも着手していた。こうした修造事業の背後には、源頼朝の政策があった。

文治五年八月、源頼朝が奥州藤原氏を滅ぼすと「天下落居」の時代となり、新たな政治段階に入った。建久元年十月、頼朝が初めて上洛して権大納言・右近衛大将に任じられたし、娘大姫を後鳥羽天皇に入内させようとするなど、頼朝は積極的に朝廷接近策を講じている。そうした中で、頼朝は東大寺・東寺など顕密寺社の再建を積極的に支援した。戦時体制下で確立した幕府の軍事体制（守護・地頭制）を、平時に定着させてゆくのが頼朝の課題であつたし、西国の御家人制度を整える必要もあつた。そのためには幕府が仏法の守護者であり、平和を再構築する権力であることをアピールし、朝廷や西国の地域社会に、幕府の存在が彼らにとって有用で

あることを理解させる必要があった。文覚の造営事業は、頼朝のこうした政治目的に沿って実施された。

このように文覚は、源頼朝と挙兵の夢を語り合った仲であり、挙兵後は頼朝と後白河院との間を仲介して十月宣旨の実現に貢献した。さらに内乱後は、顕密寺院を修造することで、守護・地頭制を定着させようとする頼朝を背後から支えたのである。頼朝にとって文覚は、きわめて有用な人物であった。しかし、源頼朝が亡くなると、文覚は政治的バックアップを失う。頼朝が亡くなった翌月の建久十年（一九九二年）二月、三左衛門事件に関わったとして文覚は逮捕されて佐渡に流罪となった<sup>(18)</sup>。さらに赦免後も後鳥羽院に疎まれて対馬・鎮西に流され、結局、文覚は鎮西で客死した。東寺や高野大塔などの修復は中断され、神護寺領も散失することになったのである。

以上、文覚について論じてきた。次章では、文覚の弟子である性我に話を移そう。

## 第二章 惠眼房性我について

惠眼房性我（一一五〇―一二〇〇）の出自は不明。専覚房（千覚房）ともいう。文覚の弟子であり、鎌倉で勝長寿院と永福寺の別当をつとめた。源頼朝の護持僧でもある。仁和寺御室守覚と勧修寺興然から伝法灌頂をうけており、広沢・小野両流を受法した。和歌も詠んでおり、私撰和歌集である『玄玉集』に九首収録されている。性我については横山和弘・山田昭全氏の研究があるが、<sup>(19)</sup>両氏とも別々に論じていて互いの研究を参照していない。本稿では両氏の研究を踏まえながら、（ア）性我への伝法灌頂、（イ）勝長寿院・永福寺別当職と文覚・性我

との関係、(ウ)京・鎌倉での性我の活動を中心に論じたい。

まずは、(ア)伝法灌頂の問題から。この問題を検討するには、性我をめぐる師弟関係を整理しておく必要がある。性我の師は、<sup>(ア)</sup>文覚・<sup>(イ)</sup>尊実・<sup>(ロ)</sup>守覚・<sup>(ハ)</sup>興然の四名がいる。それぞれについて確認しておこう。

まず、<sup>(イ)</sup>文覚についていうと、性我は浄覚房行慈(湯浅宗重の子、明恵の叔父)とともに、一貫して文覚に仕えた。兄弟子の行慈は、次のように述べている。<sup>(20)</sup>

<sup>(神護寺)</sup> 当寺にハ、故上人御房始て御居住候しにハ、道勝房・行慈こそ、随逐しまいらせて候しか、後には<sup>(性我)</sup>尊覚房

阿闍梨も来住して候き、後々にも此両三人之外、上人御房の御意趣をこゝろえたる人も候はさりき、

神護寺の文覚に最初に付き従ったのが道勝房と行慈であり、少し遅れて性我が加わったが、文覚の意図をもつともよく知悉していたのが、この三名であったという。また、『愚管抄』は「文覚・<sup>(行慈)</sup>上覚・<sup>(性我)</sup>千覚トテ、<sup>(具)</sup>グシテ

アルヒジリ流サレタリケル中、四年同ジ伊豆国ニテ朝夕ニ頼朝ニ馴タリケル」といつている。<sup>(21)</sup> 文覚・行慈・性

我はいつも一緒に行動しており、文覚が伊豆に流罪になった折りも、性我と行慈は文覚に付き従って共に流罪に耐えた。彼らは、文覚と一心同体の関係にあった。そして流罪中の文覚が「朝夕ニ」源頼朝と交流していたことからすれば、性我と頼朝との関係も、この流罪時代にさかのぼるはずである。

治承二年(一一七八)五月に文覚が赦免されると、性我も帰洛した。そして、<sup>(22)</sup> <sup>(イ)</sup>尊実法橋に師事して密教をまなび、治承四年十月三日に「孔雀経法」を伝授されている。先行研究は尊実との関係に触れていないが、尊実(一一〇六―一一八九)は仁和寺の僧で恵鏡房法橋と号した。永暦元年(一一六〇)に寛有阿闍梨から伝法灌頂をうけ、大法房上人実任から小野流を重受している。出自は不明であるが、(伝法院学頭(寺院は不明))をつとめた知

法の僧であり、その口伝は「金貝」の略号で伝えられた。応保二年（一一六二）までに円宗寺阿闍梨に補されており、嘉応二年（一一七〇）に法橋に叙された。そして承安二年（一一七二）から五年まで法琳寺別当に任じられ、正月の太元帥たいげんのほう法阿闍梨を勤修している。治承五年五月の臨時太元帥法でも阿闍梨候補として名が挙がった。<sup>(23)</sup>以上が尊実の略歴である。性我には尊覚房と恵眼房という二つの房号があるが、「覚」と「恵」の共通性からして、尊覚房は文覚から与えられ、恵眼房は恵鏡房尊実から授けられたと考えられる。

このように性我は治承四年（一一八〇）十月、尊実のもとで密教を学んでいたが、尊実から伝法灌頂を受けることなく終わった。その原因は内乱の勃発と、鎌倉での登用にある。性我が京都で密教を学んでいたころ、源頼朝は同年八月に挙兵し十月には南関東を制圧した。そして、養和元年（一一八二）七月には頼朝と後白河院を仲介するために文覚が奔走し、翌年四月には文覚が江ノ島で祈禱を行った。とすれば、性我もまた受法を中断して、文覚とともに東西を往反したはずだ（治承四年十月に性我が尊実から受法している事実は、逆にいえば、文覚がその時点でまだ頼朝と合流していなかった可能性が高い）。

文治元年（一一八五）八月に性我は源義朝の遺骨を鎌倉に運び、その埋葬の儀を執り行つて、同年十月に勝長寿院の別当に任じられた。その後は幕府の心経会に参加したり、「大仏頂如来放光悉怛他鉢囉陀羅尼」「大随求陀羅尼經」や「中論」などを鎌倉で書写している。<sup>(24)</sup>このように性我は、内乱の勃発と、鎌倉での登用のために、尊実からの受法が中途半端なままで終わったのだ。そして尊実は、文治五年四月に八十四歳で没した。

こうしたなかで建久二年（一一九二）四月、性我は◎仁和寺御室守覚から伝法灌頂をうけた。同年四月上旬に性我が『孔雀經音義』<sup>(25)</sup>を書写しているが、伝法灌頂の一環として考えるべきだろう。この伝法灌頂について横

山和弘氏は、①建久元年十一月に頼朝が上洛した際に、頼朝が守覚と面談しており、その時に伝法灌頂が話し合われた可能性がある、②伝法灌頂の費用を幕府政所が負担しており、性我への伝法灌頂は朝幕関係の一環として行われた、と論じている。<sup>(26)</sup> 氏の指摘は的確で貴重なものであるが、これについては、なお残された論点がある。

第一は、鎌倉での護持僧制度の発足である。仁和寺藏『真言伝法灌頂師資相承血脉』や『東宝記』は性我について「鎌倉前右大将護持僧」<sup>(源頼朝)</sup>「右大将家護持僧」と記している。<sup>(27)</sup> 性我は、今のところ鎌倉幕府で確認することのできる最初の將軍護持僧である。しかも仁和寺藏『真言伝法灌頂師資相承血脉』は守覚からの伝法灌頂について、「鎌倉前右大将護持僧、仍申請之」と記している。頼朝の護持僧であることを根拠に、伝法灌頂を求めたのだ。つまり頼朝は護持僧制度を発足させるに際し、信頼のあつい性我を護持僧に任じ、仁和寺御室守覚に対し性我への伝法灌頂を要請したのである。つまりこの伝法灌頂は、鎌倉の將軍護持僧制度の発足・整備の一環でもあった。<sup>(28)</sup>

第二に、この伝法灌頂が鎌倉で密教を本格的に整備する嚆矢となった。性我への伝法灌頂は建久二年（一九二）四月に行われたが、当時の鎌倉には東密・台密をふくめて、伝法灌頂をうけた僧侶が皆無であった。唯一の例外が定豪であるが、定豪は建久二年三月に鎌倉に下向して供僧に補任されたばかりである。性我の伝法灌頂が計画された段階では、密教祈禱をきちんと勤修することのできる幕府僧は存在しなかった。ところがこの伝法灌頂を皮切りに、伝法灌頂をうけた幕府僧が増えてゆく。

鎌倉真言派では性我の伝法灌頂と前後して、忍辱山流の定豪を京都から迎えたし、性我也建久六年八月には

勧修寺興然から重受して、小野・広沢両流を受法することとなった。山門派では、台密小川流の祖である忠快（平教盛の息、青蓮院覺快入室弟子）を迎えている。源頼朝は建久六年六月、東大寺大仏供養からの帰途、忠快を帯同して鎌倉に戻った。寺門派では、園城寺の行曉法印から伝法灌頂をうけた僧侶が続出する。鶴岡八幡宮別当の円暁が建久三年五月に行曉から伝法灌頂をうけたし、のちに頼朝法華堂の別当となった行慈（文覚の弟子とは別人）も建久五年二月に伝法灌頂をうけた。鎌倉に居住していた長暁は建久七年に、そして二代目鶴岡八幡宮別当の尊暁も建久八年十二月に、行曉から伝法灌頂をうけている。<sup>(29)</sup> 伝法灌頂をうけること自体は個人的な問題であるが、当時の伝法灌頂は京都でしか行われなかったため、幕府僧の場合、かなり長期間、鎌倉を不在にする。そのため、幕府僧の伝法灌頂には頼朝の了解が必要となるが、これらが実現していることは、源頼朝が建久年間に鎌倉で密教三流の整備に取り組んだことを物語っている。

ところで、伝法灌頂は一般に師と弟子との間で完結するものだが、そこに俗権力が関与することも珍しくない。特に鎌倉では、北条時宗が仁和寺御室法助に対して、従兄の頼助（執権北条経時の息）を弟子にするよう求めた事例が存する。<sup>(30)</sup> 北条時宗のこの要請は、寛元・宝治の政変で低迷していた鎌倉真言派を、幕府が再建することを表明したものであり、これが契機となって鎌倉で仁和寺御流の典籍が広く流布し、その歴史的影響は非常に重大なものとなった。それに比べると、性我への伝法灌頂が鎌倉に及ぼした影響は限定的であったが、ともあれ守覚への伝法灌頂の要請は、頼朝が性我を中心に鎌倉真言派を整備し、鎌倉での密教祈禱体制を本格的に構築しようとしたことを意味している。鶴岡八幡宮の二十五供僧が整えられたのが建久年間であるが、頼朝はその時期に、護持僧制度や密教三流の整備にも着手していた。

こうした性格をもっていたために、横山和弘氏が指摘したように、性我への伝法灌頂は朝幕関係の一環として行われるという特殊性を孕むことになる。第一に、先述のように、性我への伝法灌頂を源頼朝が仁和寺御室守覚に依頼した。

第二に、伝法灌頂の費用を幕府が負担した。灌頂道場の設営費や大阿闍梨・色衆への布施費用は、本来は受者が負担すべきものであるが、今回は鎌倉幕府の政所が支弁した。<sup>(31)</sup> しかも、布施の額が異様に多い。灌頂阿闍梨である守覚への布施の細目は不明であるが、僧綱色衆に「綾三疋、長絹三疋、色々布十段、白布十段、米三石」が与えられ、凡僧色衆に「絹二疋、色々布十段、白布十段、米二石」が布施として贈られた。<sup>(32)</sup> 当時の伝法灌頂では、色衆の布施は「一重一裹」で、所作人に一重を加えるのが一般的であつたが、それに比べると豪華さが際立っている。

第三に、朝廷が性我を神護寺阿闍梨に任じて、その箔付けを行った。その経緯はつぎの通りである。神護寺の再建が進展した文治六年（一一九〇）二月、後白河院は神護寺に臨幸して常夜燈をともした。そして、同年六月に神護寺に阿闍梨五口を寄せ、同年十二月に五名がそれに任じられている。こうして神護寺の体制が整えられたが、朝廷はさらに翌建久二年（一一九一）三月に阿闍梨一口を加増した。そして、四月二十七日に性我への伝法灌頂が終わると、同三十日に朝廷は性我をその神護寺阿闍梨に補任している。<sup>(33)</sup> 阿闍梨一口の加増が性我のための特例措置であることは明らかだ。性我は半年後には鎌倉で活動しているので、神護寺阿闍梨の補任は単なる箔付けに過ぎないが、朝廷がそれに協力した。御室守覚だけでなく、朝廷もまた、この伝法灌頂に積極的に協力している。

第四に、守覚は性我を介して、その見返りを頼朝に求めた。それが、建久三年八月二十七日の守覚法親王御教書である。<sup>(34)</sup>ここで守覚は、①東寺の修造、②神泉苑の築垣の修築、③仁和寺諸堂の修理への協力と、④筑前国怡土庄・遠江国頭陀寺庄・肥後国玉名庄・備中吉備津神社など仁和寺関係所領への違乱停止を源頼朝に求めた。史料的な制約のため、その結果は定かでない。とはいえ、仁和寺への寄進が未達と守覚が嘆いた吉備津神社は、鎌倉末に米百石などの年貢を仁和寺に納めていて、仁和寺領となったことがわかる。安田義定による違乱停止を求めた高野山金剛寿院領遠江国頭陀寺庄については、建久四年十一月に頼朝が義定の所領を没収し、翌年八月に安田義定を誅した。<sup>(35)</sup>さらに、建仁三年（一二〇三）には頭陀寺庄の年貢米が金剛乘院（金剛寿院）に送付されており、<sup>(36)</sup>ここでも、守覚の要請が聞き届けられている。また、守覚の宿願であった東寺の修造については、建久三年十一月に文覚が東寺金堂の破損状況を調査しており、これから東寺修造が本格化した。特に東寺への修造料国の寄進を守覚は切望していたが、それも翌年四月、源頼朝の提言で朝廷は播磨国を寄せることを認めている。<sup>(37)</sup>性我を介しての守覚の要請は、相当程度、叶えられたとみてよからう。

なお、横山和弘氏は、源頼朝が、王孫の円暉を鶴岡八幡宮別当に迎え、守覚法親王から伝法灌頂をうけた性我を勝長寿院・永福寺別当に補任したことから、頼朝は「明確な意識を持って、王権に連なる人物を鶴岡・勝長寿院・永福寺の初代別当に就任させたと考えられる」とし、こうした頼朝の姿勢を「彼の限界点ともいえよう」と評している。<sup>(37)</sup>残念ながら、その評価には従いたい。なぜなら、彼らはいずれも源頼朝の身内、もしくは古参の者である。しかも彼らは、頼朝が朝廷から賊軍扱いされていた段階で、危険を冒して頼朝のもとに参じている。



朝廷が寿永二年（一一八三）四月に改めて頼朝追討の命を下したように、少なくとも同年七月の平氏西走以前は頼朝は賊軍とみなされていた。その時期に、頼朝の従兄である円暁は、寿永元年九月、頼朝の招聘に応じて鎌倉に参じて鶴岡八幡宮別当に任じられた。また、同じく頼朝の従兄である寛伝も、同年に招かれて日光山別当に補されている。<sup>(38)</sup>一方、性我は承安三年（一一七三）、伊豆に流罪になった文覚に付き従って頼朝と出会った。また、文覚は遅くとも養和二年（一一八二）四月までに頼朝のもとに参じ、<sup>(39)</sup>その後は頼朝と後白河院との仲介役をつとめており、性我も文覚と一体で行動していたはずである。しかも性我が勝長寿院別当に任じられた文治元年（一一八五）段階では、性我はいかなる意味においても「王権に連なる人物」ではなかった。このように頼朝は、リスクを冒して参じた自分の身内、もしくは古参の者を基軸にして東国仏教界を再編しようとしている。「王権に連なる人物を」選んだとの指摘は適切ではない。

性我の師の四人目は、小野流の碩学<sup>④</sup>興然である。既述のように興然は文覚と一時期、師弟関係にあったほか、文治四年（一一八八）二月には性我の兄弟子の行慈に伝法灌頂を授けている。<sup>(40)</sup>そうした縁もあって、建久六年（一一九五）八月、性我は興然から伝法灌頂をうけた。ただし、興然からの伝法灌頂は、東寺や神護寺の仏像修復と密接な関わりがあるため、詳細は後で触れることにしたい。以上、（ア）性我への伝法灌頂をめぐる問題について検討してきた。

次に、（イ）勝長寿院・永福寺別当職と文覚・性我との関係について検討しよう。性我は勝長寿院・永福寺の別当に補され、永福寺では亀淵房を居所としていたことが分かっている。<sup>(41)</sup>ところで、「永福寺別当次第」は次のように記す。

文学〈高雄上人〉

性我〈建久三年補<sup>東</sup>之、恵曜<sup>眼</sup>房阿、<sup>蘭</sup>梨

寺慶幸〈三位僧都〉

文覚を永福寺の初代別当としているが、この記事をどう考えるべきだろうか。<sup>(42)</sup>

永福寺の建立が企図されたのは、文治五年（一一八九）七月の奥州征討がきっかけである。中尊寺の二階堂大長寿院の壮麗さに感銘をうけた源頼朝は、源義経や藤原泰衡などの怨霊をしずめるため、それに倣った堂舎を鎌倉に建立することにした。これが永福寺である。同年十二月に事初めがなされ、建久二年（一一九二）二月より造立が本格化。建久三年十一月、京都から園城寺公顕を迎えて落慶供養が行われた。<sup>(43)</sup>「永福寺別当次第」は性我の別当補任を「建久三年」としており、永福寺供養が建久三年十一月二十五日であったことからすれば、性我の前に文覚が別当に任じられていたとは考えにくい。

とはいえ、文覚と性我は一心同体の関係にあり、頼朝にとって性我は文覚の分身に他ならない。この頃の文覚は東寺修造に取り組んでいたが、進捗状況がはかばかしくなかったため、建久二年十二月に鎌倉に下向して、「東寺修理上人」<sup>(44)</sup>。文覚に協力せよ、との袖判下文を頼朝から得ている。とすれば頼朝がこの時に永福寺別当補任を文覚にもちかけ、文覚が自分の代わりとして性我を吹挙げた可能性がある。

同じことは勝長寿院別当についても言えるだろう。残念ながら勝長寿院に関しては、別当次第は伝存しておらず、史料をもとに別当を復元するしかない。勝長寿院は文治元年（一一八五）に建立されたが、『吾妻鏡』正治元年（一一九二）五月十七日条に「勝長寿院別当<sup>性我</sup>恵眼房上洛」とあることから、性我が初代別当に補されたと考えられている。問題は性我が別当に任じられた経緯である。

元暦元年（一一八四）八月に文覚が上洛して、源義朝の赦免とその首の引き渡しを後白河院に申し入れた。『玉

葉」同年八月十八日条に「或人云、文覚聖人上洛、取<sub>レ</sub>在獄之義朝之首<sub>可<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>鎌倉<sub>一</sub>云々」とあるように、当初は文覚が遺骨を鎌倉に届ける予定であった。ところが神護寺の再建で忙しくなったため、文覚はそれを性我に託した。『吾妻鏡』文治元年八月三十日条は、義朝の遺骨を持参した者を「<sup>(覺)</sup>文学上人門弟僧等」と記しており、幕府は性我を文覚の「門弟」としか捉えていない。そして九月三日、義朝の遺骨の埋葬を性我が行い、十月二十四日に勝長寿院の落慶供養が行われ別当に任じられた。<sup>(45)</sup>最初の予定どおり、遺骨の持参と埋葬を文覚が行っていたれば、文覚が勝長寿院の別当に任じられたはずである。永福寺と同様に勝長寿院においても、性我はあくまで文覚の代理に過ぎない。</sub>

では、文覚・性我と両別当職の関係を、どのように理解すればよいのだろうか。そこで想起すべきは、本主的門首と遷替的門首の存在である。かつて私は青蓮院門首に二種類あると述べた。本主的門首は後継者を決定する伝領権と、門跡を譲進した後の悔返権を保持している。これに対し遷替的門首は、管領権を一時的に預けられた「宿申」だけで伝領権・悔返権をもっておらず、門首になってからも本主的門首の管理下におかれていた。たとえば慈円は、青蓮院門跡を真性に譲った後も、真性を差し置いて無動寺檢校房政所下文を発給したし、朝仁入道親王（道覚）に門跡の譲状を発給して現任門首（真性）の解任権まで付与している。慈円は門首辞任後も青蓮院門跡の実権を掌握していた。

同じことは大伝法院隆海、鶴岡八幡宮定豪についても言える。大伝法院座主の隆海は永万二年（一一六六）に座主を辞任してからも、実禅・禅信・覚尋の三代の座主を相次いで指名した。しかも裳切騒動（一一六八）では「貫首」として後白河院と交渉したし、さらに承安三年（一一七三）には大伝法院を仁和寺御室に寄進してそ

の末寺となることを決している。また鶴岡八幡宮別当の定豪は、承久三年（一二三二）に別当職を譲ってからも、「本主」「前職」として鶴岡八幡宮を「多年管領」しており、鶴岡の供僧補任状や社領への下知に袖判を据えたり、鶴岡別当の悔返・改替まで行った<sup>(46)</sup>。

以上の事例からすれば、勝長寿院・永福寺別当職をめぐる文覚と性我とは、本主と遷替的別当の関係と捉えてよいのではあるまいか。実際、隆海や定豪が本主権を保持したまま辞任して、弟子を遷替的座主・別当に任じたのは、在京活動の多忙さが理由であった。その点からしても、文覚を本主とする理解が妥当であると思われる。そして両別当職に対する文覚の本主権は、三左衛門事件による文覚の失脚・流罪によって消滅したと考えたい。

以上から、①勝長寿院・永福寺ともに源頼朝が文覚を初代別当に補任した、②文覚は、京都での活動の多忙さを理由に、本主権を留保したまま、遷替的別当として弟子の性我を吹挙し、頼朝がそれを認めて性我を別当に任じた、と結論できよう。両別当職は、朝廷との交渉に奔走した文覚へのねぎらいであり、恩賞である。

最後に、(ウ)京・鎌倉での性我の活動について見ておこう。既述のように性我は文治元年（一一八五）に勝長寿院別当に補任され、建久二年（一一九二）には頼朝護持僧に補されて守覚から伝法灌頂をうけ、建久三年には永福寺別当に任じられた。とはいえ、鎌倉における性我の活動は、さほど目立ったものではない。文治二年正月の幕府心経会への出仕、建久二年九月、勝長寿院での源義朝追善供養の導師、建久三年四月の後白河院追善における三七日・五七日仏事導師、建久五年閏八月の木曾義高追善仏事の伴僧といった事蹟しか確認できない<sup>(47)</sup>。勝長寿院・永福寺別当、頼朝護持僧として、鎌倉の仏教界の中核的存在であるにもかかわらず、鎌倉での性我

の足跡は驚くほど希薄である。それは何故なのか。その理由は、京都での活動が予想外に多忙となったからだ。建久元年から二年の前半にかけて、性我は守覚から伝法灌頂をうけるために在京していた。建久四年から東寺の修造事業が本格化すると、性我は建久九年冬まで文覚を支えることを優先した。たとえば建久四年三月に幕府は後白河院周忌の千僧供を行ったが、その法要で中心となった宿老僧一〇名に性我の名が見えない<sup>(48)</sup>。勝長寿院・永福寺の僧侶たちが請僧されているにもかかわらず、両寺別当である性我が参加していない。その理由は上洛だろう。同年正月から文覚は、東大寺と東寺の修造料国を確保するため朝廷と幕府を仲介しており、四月にそれが認められて、東寺の修造が軌道に乗りはじめる。そして、文覚は東寺の南大門、仁王像、中門二天、金堂、金堂本尊、講堂、講堂諸尊、五重塔、灌頂院、鎮守八幡宮、経蔵を造営・修復していったが、性我は行慈とともに文覚を支えた<sup>(49)</sup>。

建久六年(一一九五)八月に、性我は④勸修寺興然から小野流の伝法灌頂を重受し、「転法輪菩薩摧魔怨敵法」<sup>(50)</sup>「後七日私記(仁平三年)」などを伝授されている。この伝法灌頂は仏像修復の準備と考えてよい。翌年の建久七年に、性我は運慶を連れて南都に下向して、元興寺の二天像と八大夜叉像を模写させて神護寺中門に安置しているし、建久八年には、東寺講堂の仏像修復を中心となって担った。しかも、文覚・行慈・性我の師である興然は、東寺講堂の仏像修復に協力している。

興然の関与については、従来の研究で指摘されていない。そこで、この点を明らかにするために、東寺の仏像修復の経緯を確認しておこう。

東寺の講堂には二一体の仏像が安置されている。このうち六体は文明十八年(一四八六)の土一揆で焼失・再

建されたが、残る一五体は性我・運慶が修復した像を今に伝えている。修理の次第は次の通りである。寺内に「仏所屋」と「漆工所」を設けて、運慶らが講堂の仏像を運び出して修復を始めたところ、建久八年五月七日、阿弥陀像の頭部から、小さな銅筒が転がり落ちた。調べてみると、中に真言を描いた紙片と仏舍利が見つかった。驚いて他の仏像を確認してみると、諸仏菩薩の頭部髪際から銅筒が相次いでみつかり、その中に仏舍利・名香と梵字真言の紙片が収められていた。造仏当初にまでさかのぼる貴重な宝物であるため、一箇にまとめ安置したが、噂を聞きつけて「京中上下諸人」がこぞって結縁に來たという。そして修復が完了すると、性我が諸仏に仏舍利などを戻している。

この時に発見された仏舍利や真言の記録、そして発見の経緯を記した史料群が、称名寺や高山寺の聖教に伝存している。それが、①「東寺講堂御仏所被籠御舍利員数」、②「東寺講堂御仏御舍利員数」、③「東寺講堂仏共被籠真言」、④「被籠東寺講堂仏真言」の四点の史料である。幸いにも、金沢文庫の展示図録『運慶』には称名寺蔵の四史料の写真が掲載され、その一部が翻刻・紹介されている。また、⑤『東宝記』第一の「建久八年修理次第」「尊像所納物事」「所納仏舍利員数」にも関連する記述がある。<sup>(52)</sup>これらは内容的に重複する部分もあるが、整理すると次のようになる。

- (i) 仏像から発見された一一裹二五粒の仏舎利の記録(①②⑤)
- (ii) 仏像から発見された真言の記録(①②③④⑤)
- (iii) 仏像から発見された香の記録(②)
- (iv) 銅筒の形状と内部の記録(①⑤)

(v) 仏舍利発見・奉納の経緯の記録①②⑤

このうち(i)の仏舍利については性我が記録し、(iii)は行慈が記録し、(v)は行事僧永真が記録している。

では、興然はこの事業にどのように関わったのか。まず興然は、この時期に東寺講堂の仏像を実見している。

覚禪アサリ抄云、師云（興然）、建久年中、高雄聖人東寺講堂御修理之間、大日宝冠五仏奉<sub>三</sub>拝見<sub>一</sub>、中尊胎界大日云々、

『東宝記』の右の記述によれば、文覚による東寺講堂の修理が行われていた時、興然は東寺講堂に安置されていた大日如來の宝冠五仏を「拝見」した、と述べている。さらに興然は、銅筒から発見された真言の解説にも協力した。④「被籠東寺講堂仏真言」は次のように記す。

(編裏書)  
「被<sub>レ</sub>籠<sub>二</sub>東寺講堂仏<sub>一</sub>真言」

修理人高尾上人文学弟子二人<sub>上覚房行慈  
專覚房性我</sub>

建久九年正月日記<sub>レ</sub>之 興然

東寺講堂仏共被<sub>レ</sub>籠真言

(中略、五仏・五菩薩・五大尊の仏名と真言一一)

建久年中、東寺修理之間、講堂御仏同修<sub>二</sub>理<sub>一</sub>之、件仏共髮際銅筒奉<sub>レ</sub>入、仏舍利<sub>二</sub>粒被<sub>レ</sub>籠<sub>レ</sub>之、此真言相<sub>二</sub>具<sub>一</sub>之、皆以<sub>二</sub>御筆<sub>一</sub>、大日・降三世・大威徳、当時舍利不<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>坐、若紛失歟、

この史料は少し意味が取りにくい、しかし、仏像修復の最中に興然が東寺講堂を訪れていること、さらに発見された真言の記録を残していることからして、興然が真言の調査に関わったのは、疑いあるまい。

銅筒から発見された真言は、摺本の真言と「御筆」(空海自筆)の梵字真言とから成り、中には朽損して見つからないものもあるなど、その調査は困難をきわめた。しかも興然は文覚・行慈・性我の師であり、真言密教の碩学中の碩学である。そうしたことを思えば、指導・助言の形で興然が読解に関与したことは、無理な想定とはいえない。興然は、東寺の仏像修復に際して性我を補佐したのである。逆にいうと、興然の協力があつたために、性我は仏像の修復を主導することができたと言えるだろう。

仏像修復における性我の主導性については、横山和弘氏が明らかにされた。横山氏は⑤『東宝記』の記事をもとにそれを論じたが、ここでは称名寺所蔵の①④をも含めて、改めて性我の主導性を確認しておこう。まず第一に性我は、発見された仏舎利の記録を「性我阿闍梨記」「端日記」に詳細にとつたし、行慈・興然と共に、発見された真言を記録した。

第二に性我は、一人で極秘に仏舎利を仏像に奉納した。これについては『東宝記』の記述があるが、ここでは①の「御舎利奉求出事」の一節を掲げておこう。

(建久)  
同第九年冬比、如<sub>レ</sub>本被<sub>レ</sub>籠畢、今度銅上不<sub>レ</sub>裏、無<sub>レ</sub>書付、以<sub>ニ</sub>麦漆<sub>一</sub>合固了、奉<sub>レ</sub>籠所、余人所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知也、  
專覚房阿闍梨(性我)、在所許ハ令<sub>ニ</sub>見知<sub>一</sub>給、不<sub>レ</sub>用<sub>ニ</sub>漆工等<sub>一</sub>、自作<sub>ニ</sub>木糞カヒ<sub>一</sub>、布キセ并奉<sub>レ</sub>漆畢、修理了  
テ薄押已前ニ講堂ニ奉<sub>レ</sub>渡テ、四壁ヲ塞テ密々ニ奉<sub>レ</sub>納了、彼在所、雖<sub>レ</sub>為<sub>ニ</sub>入室瀉瓶之弟子<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>示、可<sub>ニ</sub>  
一身之心底朽畢、夢々不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>漏散<sub>一</sub>、且又護法天等大師、可<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>御知見<sub>一</sub>、恐々、

建久九年の冬、運慶らの仏像修復が一段落すると、性我は、金箔を押す前に仏像を講堂に運び込ませた。そして講堂を閉め切って漆工に頼ることなく、性我はたった一人手ずから仏舎利の入った銅筒を埋納し、その上に



木糞こくそを加え布をあてて漆で塗り込めた。埋め込んだ場所は誰にも教えず、性我一人の胸に収めたという。<sup>(55)</sup>

東寺講堂二体の仏像は立体曼荼羅と呼ばれ、真言密教の根幹にかかわる聖なる仏像群である。それだけに修理を行うには、さまざまな軋轢があつたはずだ。事実、後に文覚流罪の罪状として、東寺講堂の仏像を動かしたことが取り沙汰されている。<sup>(56)</sup> 仏像を戻した時に配置を誤ったとの批判は誤解であつたことが後に判明するが、このことから分かるように、東寺講堂の仏像修復はきわめてセンシティブな作業であつた。そして、性我はこの困難で重大な事業を主導した。源頼朝の護持僧であり、かつ守覚から伝法灌頂をうけたという權威性と、守覚・興然から教授された密教の知識、および興然の協力が性我の主導性を支えたのである。

このように性我は建久年間に、文覚を補佐して東寺や神護寺の修復に携わつた。鎌倉での宗教活動が希薄な原因はここにある。もちろん、幕府僧の上洛には源頼朝の許可が必要であつた。それゆえ、上洛して文覚を補佐することは、源頼朝が決したとみるべきだろう。建久年間の頼朝は、鎌倉の祈禱体制の充実よりも、京都・奈良の顕密寺院の再建を優先させたのだ。戦時体制で獲得した権能を平時に定着させることが、頼朝の最大の課題であり、それをバックアップさせるため、性我に命じて文覚の顕密寺院修造を補佐させた。そのために、鎌倉での性我の活動は不十分なまま終わったのである。

建久十年(一九九)正月に源頼朝が急逝すると、翌月文覚が逮捕され佐渡に流罪となつた。そこで性我は同年五月、永福寺・勝長寿院別当職を辞して上洛した。神護寺の再建や東寺の修復事業を継続するためであつたが、後鳥羽院・土御門通親を前にして性我のできることは限られていた。やがて性我は体調をくずし、ほとんど成果をあげることもできないまま、正治二年(二〇〇)三月に死没したのである。<sup>(57)</sup>

次に走湯山の真言僧の検討に移ろう。

## 第三章 走湯山と走湯山密厳院

### 第一節 走湯山と鎌倉幕府

走湯山は鎌倉幕府にとってたいへん重要な宗教施設であるが、筆者はこれまで走湯山について取り上げてこなかった。鎌倉真言派を論じるには走湯山真言僧の検討が不可欠であるが、それを達成するには、走湯山全体の中で走湯山真言僧を捉える必要がある。そこで本章第一節では、走湯山と鎌倉幕府の関係について、第二節では走湯山の寺院構造と主な幕府僧について考察することにし、走湯山の真言僧は後者の中で取り上げたい。

伊豆国熱海の走湯山は伊豆山神社・伊豆山権現ともいい、古くより霊山として著名である。『伊呂波字類抄』(平安末の成立)は、遍歴修行していた沙弥賢安が承和三年(八三六)に走湯権現の夢告によって堂を建立し千手観音像を安置したとの伝承を伝えているし、歌人である相模は、治安二年(一〇三二)ごろに走湯山に詣でて「走湯百首」を奉納した。『新猿樂記』(十一世紀中葉の成立)は「熊野、金峰、越中の立山、伊豆の走湯」などを験者の修行地に挙げたし、『梁塵秘抄』(平安末の成立)は「四方の靈験所は、伊豆の走湯、信濃の戸隠、駿河の富士の山」と述べている。また伊豆山神社の木造男神像は十一世紀の作品であり、伊豆山の裏山からは永久五年(一一一七)の経筒が発見されている。<sup>(58)</sup>このように走湯山は、平安中後期の段階でかなりの発展をみせていた。

この走湯山には多様な僧侶が混住していた。走湯山は平安末には、箱根山とともに延暦寺の末寺となってい

たが、他方で頼朝は、挙兵を支援した東密僧に走湯山密厳院を創建させている。鎌倉時代の成立と考えられる『走湯山縁起』は、延暦寺安然の来山やその弟子隆保による法華八講の創始、「天台学徒」龍観の来住に触れる一方で、空海が来山して宝塔を造立し、根本堂・一切経蔵の額を書いたエピソードを記している。<sup>(59)</sup> 事実かどうかは別にして、これらの記事は、天台・真言の僧侶が混住していた走湯山の実態を反映しているよう。一方、北条政子が帰依した走湯山法音尼は「一生不犯」の尼であったし、法華読誦と密教を併修した「伊豆御山尼妙真房」もいた。<sup>(60)</sup> 中世の顕密仏教界では尼に具足戒を授ける場が存在しないため、尼は顕密僧になることができなかった。そのため法音尼らが走湯山の寺僧になったとは考えられないが、在俗出家した尼たちが聖地に集住して修行に励み、やがてセミプロ化して信者をもつようになったのだろう。また鎌倉末には日蓮六老僧の一人である日興が、尼妙円から譲られた走湯山東院を弟子に譲っており、<sup>(61)</sup> 鎌倉後期の走湯山には日蓮宗の僧も居住していた。このように走湯山は多様な僧侶を包摂した聖地であった。

とはいえ、走湯山のこのような在り方は、中世において特に珍しいものではない。たとえば中世の高野山は、金剛峯寺以外にも大伝法院・金剛三昧院のほか、仁和寺御室や聖たちが展開しており、多様な集団が混在していた。中世高野山は金剛峯寺とイコールではない。同様に下野の日光山や三河の瀧山寺も天台・真言の僧侶が混住している。中世の顕密僧は諸宗兼学が普通であったし、顕密寺院も諸宗僧侶の混在がむしろ一般的であった。

なお、『走湯山縁起』第二の末尾には、「社司（通智大法師・卓苅大法師）」と記されている。<sup>(62)</sup> このことは鎌倉時代の伊豆山神社が、石清水・鶴岡八幡宮のように、僧侶が社務・社司をつとめる体制になっていたことを

示唆している。

では、走湯山は鎌倉幕府と、どのような関係を取り結んだのであろうか。鎌倉幕府にとって走湯山は単なる一寺院に留まらない重要性をもっていた。そのことは、(ア)二所詣、(イ)走湯山の造営役、そして(ウ)鎌倉初期の幕府祈禱体制の三点からうかがうことができる。

まず(ア)鎌倉幕府の二所詣については、田辺旬氏をはじめ多くの研究があり、それらをもとに概観しておこう。二所詣は走湯山・箱根山の二所に三島神社が付け加わったものである。文治四年(一一八八)に源頼朝が参詣してから継続的に実施されており、史料的に確認できるものだけで五〇回余りに及んでいる。当初は走湯山―三島社―箱根山という参拝順であったが、文治六年より後は箱根山―三島社―走湯山の順に改められた。「伊豆詣」とも言われており、三社の中でも走湯山が特に重視されている。二所詣には本人が参詣するものと、本人の代わりに奉幣使を派遣するケースがあったが、いずれの場合も二所詣の前に本人が精進潔斎した。二所詣の主体は基本的に鎌倉殿であるが、鎌倉末の北条貞時・高時の時代になると、北条得宗を主体とする二所詣が恒例化するようになった。なお、二所詣では先達をたてて参詣しており、「一乗房阿闍梨」「権少僧都善道」「伊予法眼教導」といった先達の名が確認できるが、史料が断片的なため、彼らの性格を明らかにすることができない。<sup>(64)</sup>

さて、この二所詣は幕府草創の苦難を想起して、結束を固めるという意義をもっていた。三社のうち走湯山は、挙兵前から頼朝夫妻が走湯山の僧と師檀関係を結んでおり、挙兵に際しても北条政子をかくまうなど、走湯山の僧がさまざまな支援を行った。箱根山は別当行実が頼朝に好意的であり、石橋山の合戦で敗れた頼朝を

一時かくまって、その脱出を助けた。三島神社はその神事の日に頼朝が奉幣使を派遣したうえで挙兵しており、この三社は頼朝の挙兵と密接に関わっている。二所詣は幕府創成の苦難をしのぶとともに、それを加護した神々に感謝を捧げる行事であった。しかも二所詣で奉納する神物は幕府政所が調進しており、供奉の随兵は御家人役として課された。<sup>(65)</sup> 鎌倉幕府の公的行事と位置づけられていたのである。ちなみに貞永元年(一二三二)に制定された御成敗式目は、その末尾で「梵天・帝釈・四天王、惣日本国中六十余州大小神祇、別伊豆・菅根両所権現、三島大明神、八幡大菩薩、天満大自在天神」に起請しており、<sup>(66)</sup> 鎌倉幕府にとって二所権現と三島大明神が重要であったことを示している。

次に、(イ)走湯山の造営役をみてみよう。走湯山は建久八年(一一九七)、承久元年(一二一九)、嘉禄二年(一二二六)、安貞二年(一二二八)、文永四年(一二六七)、永仁四年(一二九六)と頻繁に焼亡したし、建仁元年(一二〇一)には大風の被害も受けている。<sup>(67)</sup> それだけに走湯山の造営は相当な負担になったと思われるが、鎌倉中後期には「走湯山造営奉行」が幕府に置かれ、「走湯山・八幡宮造営用途」<sup>(68)</sup> 「走湯山舞装束用途」は関東御公事として御家人に賦課された。<sup>(69)</sup> それ以前は北条政子・竹御所らの負担と勧進によって再建されたが、その勧進もただの勧進ではない。たとえば源頼朝は建久九年に「柱一本ッ、諸大名等二被<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>之」と、柱の寄進を有力御家人に命じている。かつて頼朝は、信濃国御家人に善光寺造営の助成を命じた際、「若不<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>加此功<sub>一</sub>之者、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>三</sub>所知領掌之儀<sub>二</sub>」と脅したが、走湯山の造営勧進も頼朝の命による半強制的な助成であった。<sup>(69)</sup> その意味では、走湯山の造営は幕府成立期より御家人役としての性格を帯びていた。この点は、鎌倉幕府と走湯山の関係を考えるうえで非常に重要である。

次に、(ウ)幕府祈禱体制における走湯山の位置を確認しよう。鎌倉幕府は鶴岡八幡宮を頂点とする祈禱体制を構築してゆくが、走湯山はまず、鶴岡八幡宮を整備するうえで重要な役割を果たした。治承四年(一一八〇)十月に頼朝が南関東を制して鎌倉に入ると、走湯山の良運を暫定的に鶴岡八幡宮の別当に補任してその整備に当たらせた。翌年十月には走湯山の禅叡・玄信大法師を鶴岡の供僧に任じし、建久四年(一一九三)までは鶴岡八幡宮で行われる童舞は、走湯山と箱根の稚児によって担われていた。<sup>(70)</sup>このように鶴岡八幡宮は、走湯山の支援を受けながらその体制を整えたのである。

しかも、初期幕府における祈禱体制のなかで、走湯山は重要な位置を占めていた。たとえば治承五年(一一八二)八月に頼朝は、鶴岡八幡宮と走湯山・箱根山に長日祈禱を命じたが、その内容は次の通りである。

#### 御祈禱次第事

毎月朔 大般若經一部 衆三十人

毎月朔 仁王講百座 衆十二人

長日 観音品 衆百人、毎日一人充

四季 曼荼羅供 衆四人

右、御祈禱注文如<sub>レ</sub>件

治承五年八月晦日

相当な数の僧侶が幕府祈禱に携わっている。また、文治三年(一一八七)四月には、後白河院の病悩平癒のため大般若經転読を「鶴岡・勝長寿院・宮根山・走湯山并相模中寺々供僧」に命じし、建久二年(一一九二)正月

には頼朝が、鶴岡供僧と走湯山・箱根の衆徒に対し、年末まで毎日十二卷薬師經を讀誦するよう命じており、この当時、走湯山と箱根は幕府祈禱を中心となって担っていた。<sup>(71)</sup>

そのことは、後白河院の七七日仏事からもうかがえる。建久三年三月に後白河院が亡くなると鎌倉でも追善仏事が行われ、五月八日には勝長寿院で四十九日の百僧供が執り行われた。そこに請定された百僧の内訳は、鶴岡が二十口、走湯山と箱根山が十八口、勝長寿院が十二口、慈光寺十口、大山寺・観音寺・高麗寺・浅草寺・真慈悲寺・国分寺が三口などとなっている。<sup>(72)</sup> 鶴岡八幡宮について走湯山と箱根が多く、勝長寿院を上回っている。このように鶴岡八幡宮と走湯山・箱根山は初期においては、幕府祈禱の中核を占めていた。

ところが、鎌倉の御願寺体制が整ってくると、鎌倉の仏事に走湯山の僧侶が招かれることが激減する。建久五年に足利義兼が行った鶴岡八幡宮一切経供養では請僧六十口のうち、鶴岡が三十五口、勝長寿院・永福寺が各十口であるのに対し、走湯山は二口、慈光寺・観音寺・箱根山は一口に過ぎない。さらに承久の乱での鶴岡八幡宮仁王百講では「<sup>(73)</sup>当宮并勝長寿院・永福寺・大慈寺等供僧」が請定されたし、弘長元年(一二六二)の鶴岡大仁王会では、請僧百口のうち、勝長寿院・永福寺・大慈寺・鶴岡の四ヶ寺供僧が八十三口を占め、残り十七口を、隆弁(鶴岡別当)と明王院の良瑜・嚴恵らが自分の弟子などから選任している。承久・弘長の請僧百口に走湯山の僧侶が入っていない可能性が高い。<sup>(74)</sup> 鶴岡八幡宮・勝長寿院・永福寺を中心とする鎌倉の御願寺体制が整備され、京都から下向した顕密高僧が別当・供僧に着任するようになると、鎌倉の仏事に走湯山の僧侶を動員する必要がなくなったのである。もちろん、嘉禄三年(一二三二)には走湯山で幕府主催の大仁王会が行われているし、<sup>(75)</sup> 二所詣も継続的に実施されるなど、走湯権現への尊崇に変化はないが、鎌倉の仏教界に占める走湯

山住侶の役割は低下し、現地で伊豆山権現の神威高揚を図りながら幕府・將軍の安穩を祈ることが中心となった。とはいえ、初期幕府の祈禱体制における走湯山の重要性を忘れてはならない。

このように走湯山は、幕府の祈禱体制の中核施設の一つであった。しかも御家人役による造営という在り方からすれば、走湯山は鶴岡八幡宮・勝長寿院・永福寺・大慈寺・六条八幡宮と並ぶ幕府の直轄寺院（鎌倉殿御願寺）と言えるだろう。事実、『吾妻鏡』治承四年（一一八〇）十月十八日条は走湯山を「新皇并兵衛佐殿御祈禱所」と述べている。とはいえ、走湯山・箱根山は平安末の段階では延暦寺の末寺であった。とすれば、鎌倉幕府の成立と崩壊は、走湯山の在り方に大きな変化をもたらしたに相違ない。次節では、走湯山の幕府僧に触れながら、その点について検証しよう。

## 第二節 走湯山の寺院構造と幕府僧

走湯山には源頼朝に重用された二人の僧侶がいる。①覚淵と②良暹である。本節では、この二人を取り上げながら、走湯山の寺院構造とその変化に迫りたい。

まず、①覚淵阿闍梨（生没年不詳）は東密の僧侶で、走湯山密厳院の初代別当である。房号は文陽房（文養房）。御家人加藤景員の子であり、源延（山門派）の兄弟である。父の景員と兄弟の光員・景廉は頼朝の挙兵に参加し、その後も光員・景廉は幕府で重用された。加藤景廉は頼朝の命で安田義資を処刑し遠江国浅羽荘地頭職を与えられたし、兄の光員は、元久元年（一二〇四）の三日平氏の乱で活躍して検非違使に任じられている。加藤氏一族は、聖俗にわたって幕府に仕えた。



治承四年（一一八〇）七月五日、挙兵を決意した源頼朝は、走湯山の覚淵を呼び寄せて、法華經の供養を行わせた。もともと頼朝は法華經千部の転読を発願していたが、挙兵のためにそれを中止して、これまで転読した法華經八百部の供養を行わせたのである。すると、覚淵は「八幡大菩薩の氏人、法華八軸の持者、八幡太郎の子孫である頼朝が、法華經八百部転読の加被力で、関東八ヶ国の武士を従えて、八虐の罪人である八条入道清盛一族を討滅するのは疑いない」と、八づくしの表白を述べて、頼朝を喜ばせた。また、八月十七日に挙兵した時には、あらかじめ北条政子を覚淵の坊に避難させており、信頼の深さがうかがわれる。<sup>(75)</sup>

南関東を平定すると、頼朝は所領を寄せて覚淵に走湯山密厳院を創建させた。醍醐寺文書「密厳院寺領目錄」は治承四年に寄進された所領として、伊豆国馬宮庄、相模国の金江郷・南条内竹田十町・柳下郷を挙げて<sup>(76)</sup>いる。この目録は南北朝時代に作成されたものだが、このうち馬宮庄の寄進については裏付けがとれる。『玉葉』文治元年（一一八五）九月二十五日条に「頼朝令<sub>レ</sub>申云、伊豆国馬宮庄、乱初之比不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>御領<sub>一</sub>、寄<sub>二</sub>進当国走湯山<sub>一</sub>了、此条進退有<sub>レ</sub>恐、仍欲<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>其替<sub>一</sub>とある。つまり源頼朝が「九条兼実の所領とは知らず、挙兵直後に馬宮庄を走湯山に寄進したので、兼実には代わりの所領を進めたい」と申し入れており、この寺領目録がある程度実態を反映していることが分かる。また、嘉禄三年（一二三二）には將軍九条頼經が「相模国柳下郷・櫛橋郷・得延郷・千葉郷、武蔵国吉田郷、越後国国分寺」を密厳院別当<sub>(77)</sub>覚意に安堵したし、寛元元年（一二四三）には朝廷が「走湯山密厳院領十ヶ所」の一国平均役を免除している。密厳院は相当な規模の独自財源を有していた。残念ながら密厳院が勤仕した幕府祈禱の中身が不明であるが、それを修するため多くの供僧と所領が密厳院に寄せられたのである。高野山の金剛峯寺と大伝法院とは、財政基盤を異にしながら独自法会と共催法会

を併存させていたが、恐らく走湯山と密厳院においても同様であつたろう。

では、鎌倉幕府の滅亡は、走湯山密厳院にどのような影響を与えたのか。「伊豆国密厳院院務次第」によれば密厳院は、覚淵阿闍梨(東密)―覚誓法眼(東密)―覚意越後僧都(東密)―覚玄左馬法印(東密)―覚海左馬頭法印(東密)―覚兼大納言法印(東密)―覚遍宮内卿法印(東密)―顕潤宰相法印(山門)―具海内大臣内供(山門)―隆舜(東密)―乗基太政法印(寺門)―光濟(東密)と相承されたという。<sup>(78)</sup> 足利尊氏が挙兵したとき、尊氏の子(竹若)を連れて上洛しようとした覚遍が幕府方によって殺害されているので、鎌倉時代の別当は覚遍までである。元弘三年(一三三三)五月に鎌倉幕府が滅亡すると、同年九月に尊氏は足利一門の顕潤を密厳院別当に任じた。<sup>(79)</sup> さらに具海と、山門派の僧侶を別当に補したが、建武四年(一三三七)七月には東密の隆舜を補任している。このように幕府崩壊後は動乱の影響もあつて密厳院別当の宗派が流動化するが、鎌倉時代は一貫して東密の僧侶で相承されていた。

南北朝期に起きたもう一つの変化が、密厳院別当による走湯山の管領である。たとえば醍醐寺報恩院隆舜は、建武四年(一三三七)に密厳院別当に補任されると、鎌倉に下向して文和元年(一三五二)まで「社務十六箇年」をつとめた。つまり隆舜は密厳院だけでなく、伊豆山神社社務Ⅱ「走湯山別当」を兼帯している。隆舜が貞和二年(一三四六)に上洛し文和二年正月に亡くなると、尊氏は鎌倉一心院の乗基(寺門、天台座主仁澄の子、惟康親王の孫、久我長通の猶子、覚伊・増基の弟子)を密厳院別当に補任した。折しも、観応の擾乱の余波で、足利尊氏が鎌倉で直義党や南朝勢力と戦っていた時期である。尊氏は京都の報恩院経深(隆舜弟子)による師資相承の訴えを退けて、鎌倉の乗基を任用したのだ。さらに、武蔵で岩殿山合戦が行われた貞治二年(一三六三)に乗基が亡く

となると、鎌倉公方足利基氏は留守の賞として、鶴岡八幡宮別当弘賢（東密）を密厳院別当に補任して、「走湯山別当職」を兼帯させた。そして、応永九年（一四〇二）には弘賢がそれらを弟子の尊賢に譲っている。<sup>(80)</sup>

こうした経緯から、南北朝期には密厳院別当が走湯山別当を兼帯するようになったことが分かる。鎌倉中期より密厳院別当は、覚玄（足利泰氏の子）・覚海（同）・覚遍（足利泰氏の孫、加古基氏の子）・顕潤（足利泰氏の曾孫、洪川義春の子）と、足利一門で相承された。<sup>(81)</sup> そのため、幕府滅亡後の争乱は、足利氏が拠点をおく密厳院を中心に走湯山を再編させることになったのである。ちなみに『洪川系図』は、洪川次郎義春の子を「頼潤（密厳院法印、走湯山別当）」と記しており、この人物が「伊豆国密厳院院務次第」にいう「顕潤（山、洪川二郎入道息、宰相法印）」と同一人物と思われる。とすれば、密厳院による走湯山別当の兼帯は、元弘三年（一三三三）九月に密厳院別当に補された顕潤から始まることになる。<sup>(82)</sup>

このように鎌倉幕府の滅亡後に密厳院別当が走湯山別当を兼帯するようになるが、鎌倉時代においては、走湯山は基本的に密厳院とは別組織であった。では、鎌倉時代の走湯山はどのように運営されていたのか。それを中心となって担ったのが、源頼朝に重用されたもう一人の僧、⑤良暹である。

専光房良暹（生没年不詳）は出自が不明であるが、<sup>(源頼朝)</sup>「武衛年来御師檀」の「持戒浄侶」である。治承四年（一一八〇）十月、頼朝が南関東を制圧して鎌倉に入ると、良暹を暫定的に鶴岡八幡宮の「別当職」に補任した。そして、源頼朝の従兄である円暁が来着する寿永元年（一一八二）九月まで、良暹が別当として鶴岡八幡宮の整備に当たっている。祈禱関係では、寿永元年八月に北条政子が頼家を出産した折りに御験者としてそれに立ち会ったし、文治元年（一一八五）八月に源義朝の遺骨が京都から届けられた時には、伊豆から呼び寄せられて性我と

ともにそれを迎え、南御堂(勝長寿院)に埋葬した。文治四年二月に源範頼の瘡病を加持して治癒させたのも良暹と思われるし、文治五年の奥州征討では、頼朝は良暹に戦勝祈願の祈禱を命じるとともに、合戦の日に合わせて、頼朝邸の後山に観音堂を造立するように命じた。『源威集』によれば、これが後の頼朝法華堂に当たるといふ。建久三年(一二九二)十二月には熊谷直実が出奔・上洛するのを良暹が思いとどまらせ、頼朝はその巧みな説得に感じ入っている。また、この時に良暹は、頼朝に歳末巻数を進めており、頼朝の護持祈禱を恒常的に行っていたことが分かる。<sup>(83)</sup>

このように良暹は鎌倉や走湯山で重要な役割を果たしているが、残念ながら走湯山における良暹の地位が明確でないし、その宗派も不明である。これらを検討するうえで参考になるのが、浄蓮房源延の事蹟である。

鎌倉前期の走湯山別当は総じて明らかでないが、『吾妻鏡』安貞三年(一二二九)二月十一日条は、走湯山の源延を「当山管領之仁」と記している。浄蓮房源延(一一五六―一二三〇)は加藤景員の子であり、延暦寺で安居院<sup>あぐい</sup>澄憲から顕教を学び、豪賢から台密を受法した山門派の僧侶である。また、法然から『浄土宗略要文』を受けられ、善光寺信仰にも熱心であった。<sup>(84)</sup>そして、この源延は良暹の記事が建久四年三月で途絶えたあと、良暹に代わって鎌倉や走湯山で盛んに活動している。鎌倉では建暦三年(一二二二)に將軍実朝から呼ばれて静遍とともに法華・浄土の談義を行ったし、貞応三年(一二三三)六月には、北条義時追善を目的とする三浦義村主催の一日頓写法華經の供養導師をつとめた。同年八月には北条義時の墳墓堂(新法華堂)を供養し、さらに安貞三年(一二三九)には三浦義村の要請で来迎講を実施している。<sup>(85)</sup>また、走湯山では、北条政子・竹御所から「御代官」の「勸進上人」に任じられて、建久八年(一二九七)・承久元年(一二一九)・安貞二年の再建を進めた。また、

建保三年(一二二五)に走湯山講堂・常行堂の供養導師をつとめ、貞応元年には千手観音像の開眼供養を行つたし、翌年にも上常行堂の供養を行い、安貞三年には北条泰時邸で「当山管領之仁」として走湯山造宮の段取りを相談している。<sup>(86)</sup>

つまり「当山管領之仁」源延は、良暹の後継者としての役割を果たしており、その点からして良暹も走湯山貫首であつたと考えてよいだろう。実際、良暹は暫定的とはいへ、治承四年(一一八〇)十月に鶴岡八幡宮別当に任じられて、それからほぼ二年間にわたって鶴岡八幡宮の整備や幕府祈禱体制の構築に寄与した。それだけに、鶴岡別当の任を解かれて走湯山に戻った良暹が無役になったとは考えにくい。鶴岡八幡宮や幕府祈禱体制を整備・構築するには、走湯山の協力がなお不可欠であつた。円曉が鶴岡別当に着任したあと、良暹は走湯山の貫首として、外部からそれを支えたと考えるべきだろう。しかも、建久四年(一一九二)三月に後白河院周忌の千僧供が行われた時は、走湯山の僧侶とともにそれに仕出し、良暹は宿老僧一〇名の一人として百僧を引率している。円曉(鶴岡別当)・行慈(後の頼朝法華堂別当)・嚴耀(慈光寺別当)・定豪(後の勝長寿院別当)・賢祐(平泉惣別当)・行実(箱根山別当)といった別当クラスの僧侶とともに、走湯山の僧侶たちを率いたのである。<sup>(87)</sup>以上からすれば、良暹は頼朝から走湯山の貫首に任じられたと結論してよからう。

しかも、①平安末の走湯山が延暦寺の末寺であつた、②良暹の後継者である源延が山門派の僧侶であつた、③『吾妻鏡』寿永元年八月十二日条に「御験者専光房阿闍梨良暹」とあり、阿闍梨職を有した験者であることからして、良暹を山岳修行の山門僧と考えておきたい。

ところで、奇妙なことに、鎌倉前中期の史料に走湯山別当の職名がでてこない。<sup>(88)</sup>同じ延暦寺末寺であつた箱

根山については、行実や興実などが箱根山別当として『吾妻鏡』に登場するが、頼朝に重用された良暹は「走湯山住侶専光坊良暹」「伊豆山住侶専光房」「走湯山住侶専光房」とみえるだけだし、源延についても「当山管領之仁」と、回りくどい表現をしていて別当とは記していない。これは何を意味するのだろうか。弘安六年（二二八三）ころに成立した『沙石集』は、走湯山のことを「別当ナムドモナクテ、一和尚ヲ別当ノ如クニ思ヘル所」と述べている。<sup>(91)</sup>つまり鎌倉前中期の走湯山には別当が置かれておらず、一和尚が貫首としての役割を果たしていた。そのため走湯山別当の呼称が登場しないのである。

こうした変則的な在り方が生じた理由は定かでないが、治承・寿永の内乱が影響していることは疑いあるまい。箱根山別当の行実が頼朝の拳兵を支援したのに対し、走湯山別当は内乱期の動向が不明である。鎌倉前中期の走湯山に別当がみえないのは、この問題と関わりがあるだろう。それを示唆するのが、大藏法院条々起請の次の記事である。

一 桜下門跡庄園等

甘露寺〈在松崎〉 穴太園〈在東坂本〉 伊豆山 箱根山

大学寺〈伊勢国〉 国友庄〈近江国〉 安養寺〈丹波国〉

件庄園伝領之輩、為<sub>二</sub>厄弱<sub>一</sub>之間、毎<sub>レ</sub>処違乱、爰<sub>レ</sub>權少僧都聖覚領掌之後、為<sub>二</sub>小僧房領<sub>一</sub>、仍<sub>レ</sub>經<sub>二</sub>院奏<sub>一</sub>、達<sub>二</sub>執政<sub>一</sub>、多以令<sub>二</sub>落居<sub>一</sub>了、然而国友庄為<sub>二</sub>其本<sub>一</sub>、而未<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>返付<sub>一</sub>之間、因<sub>レ</sub>仏写經用途所<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>不足<sub>一</sub>也、所領雖<sub>レ</sub>似<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>員、地利誠有若亡、彼沙汰切畢之後、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>一定歟、件領等可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>聖覚僧都門跡永領掌<sub>一</sub>也、

この条々起請は、慈円が建永元年（二二〇六）に青蓮院門跡の洛中本坊である大藏法院の仏事・組織・財源を定

めたものであるか、そこに桜下門跡さくらくだもんせきの末寺として伊豆山と箱根山が見えている。桜下門跡は延暦寺東塔南谷の「桜本房」を指し、白河院の近臣藤原為房の子である源惠法印(？ー一一四二)の門流をいうと思われる。<sup>(93)</sup>さて、慈円はここで、①桜下坊の伝領者の政治力が弱く、走湯山・箱根山や諸莊園の知行が退転している、②聖覚が伝領すると慈円を本家に仰いで再寄進し、慈円が後鳥羽院に掛け合って多くの領掌が認められた、③所領の数は多いが収入がわずかなため、これらの年貢を大懺法院のどの費用に充てるかは、国友庄の相論が決着してから決定する、④桜下門跡の末寺莊園は聖覚の門流が本所として長く伝領すべきである、と述べている。

つまり、桜下門跡の末寺莊園は、内乱の影響によって鎌倉初期の段階で「違乱」状態にあり、走湯山支配が機能しなくなっていた。そこで聖覚が、青蓮院慈円と後鳥羽院の力を借りて立て直しを図ったのだ。とはいえ、その結果は定かでない。ここに登場する末寺莊園のうち、伊勢の「大学寺」は天福二年(一二三四)の青蓮院所領目録に「伊勢国／大覚寺」として登場するが、走湯山・箱根山も含めそれ以外の動向はよく分からない。そもそも走湯山は今や幕府の直轄寺院となっている。幾度も焼亡した走湯山諸堂の再建は幕府の主導で行われ、そこに延暦寺が関与した形跡はうかがえない。その点からすれば、延暦寺桜下門跡による走湯山の知行は鎌倉初期の段階で退転しており、慈円―聖覚による巻き返しも功を奏さなかったと考えるべきだろう。

恐らく走湯山は、院政期に延暦寺の政治的保護を期待して末寺となったのだろう。それによって阿闍梨・大法師などの僧官位を獲得し、国衙からの自立を果たしたのだろうが、鎌倉幕府の直轄寺院となった段階において、末寺役を負担してまで延暦寺の支配下に留まる必然性がない。また、延暦寺桜下門跡の立場からしても、わずかな末寺役を徴収するために、走湯山の莫大な再建費用を拠出したとは考えられない。走湯山は、鎌倉時



代には延暦寺の支配から脱したはずだ。

ただし、鎌倉時代に入ってから、桜下門跡＝安居院流との交流は途切れていない。たとえば建久四年（一九二）後白河院周忌の千僧供では、良暹らとともに求仏阿闍梨が宿老一〇人の一人として僧衆を率いたが、この求仏房恵契（覚位上人）は聖覚の弟であり、慈円（<sup>95</sup>）の弟子であって、桜下門跡にきわめて近い。また走湯山の「管領之仁」源延は、聖覚の父である安居院澄憲の弟子であるうえ、後に聖覚とともに法然に帰依した仲でもある。建保四年（一二二六）に聖覚は走湯山を訪れて中堂・法華堂の供養導師をつとめているが、これは源延と聖覚との私的な交友関係によるものだろう。<sup>96</sup> このように走湯山と安居院流との交流は、鎌倉時代に入ってからも継続している。延暦寺安居院流と走湯山・箱根山の関係は、本所―末寺という権力的な関係から文化的な関係に変化し、安居院流は『神道集』や真字本『曾我物語』の成立に関わってゆくことになるのである。<sup>97</sup>

ところで、『野沢血脈集』『密宗血脈鈔』によれば、醍醐寺報恩院隆勝（二六四―一三一四）が京都の六条八幡宮別当職への補任を求めて鎌倉に参向したところ、北条貞時から一時的に「伊豆別当職」に任じられたという。<sup>98</sup>「伊豆国密厳院院務次第」に隆勝の名が見えないことから、この「伊豆別当職」は走湯山別当職を指すと考えられる。このことは、鎌倉末の走湯山に別当職が登場し、得宗がその補任権を掌握したことを意味している。北条貞時の時代から得宗による二所詣が恒常化するが、そのなかで走湯山は、一和尚を貫首とする自治的な体制から、得宗が補任する別当制に移行して、得宗による直接的な支配に置かれたのである。その中で、東密系の走湯山別当が登場するが、しかしそこにおいても、走湯山別当と密厳院別当はあくまで別物として存在していた。鎌倉幕府が崩壊すると、足利氏の拠点である密厳院が、北条得宗の支配する走湯山を併呑するようにな



ったが、鎌倉時代の走湯山は一貫して密嚴院とは別組織として維持されたのである。

## おわりに

以上、推測を重ねてきたが、最後に本稿で明らかにしたことを、概括しておこう。

(ア) 源頼朝と拳兵の夢を語り合った文覚は、頼朝と後白河院との間を仲介して十月宣旨の実現に貢献した。  
また、内乱後は京都の顕密寺院を修造することで、源頼朝の政策を背後から支えた。

(イ) 源頼朝は恵眼房性我を勝長寿院と永福寺の別当に任じたが、性我は文覚の代理に過ぎず、両寺の初代別当は文覚と考えるべきである。文覚と性我は本主的別当と遷替的別当の関係にあったが、両寺別当に対する文覚の本主権は三左衛門事件による失脚で消滅した。

(ウ) 建久二年(一一九二)に性我は仁和寺守覚法親王より伝法灌頂をうけた。これは鎌倉において將軍護持僧制度を整え、密教を本格的に整備する端緒となった。そのため、この伝法灌頂は師弟関係の枠を越え、鎌倉幕府の主導で実施され朝廷がそれに協力した。

(エ) 性我は將軍護持僧であり、勝長寿院・永福寺の別当であったが、実際には鎌倉における性我の活動は想像以上に希薄である。東寺・神護寺修造事業で文覚を補佐すべく、鎌倉を不在にすることが多かったのがその原因である。

(オ) 建久年間における源頼朝の最大の課題は、戦時体制下で獲得した守護・地頭の権能を平時に定着させる

ことであつた。鎌倉幕府の有用性を朝廷に納得させるため、頼朝は文覚・性我に、鎌倉での活動よりも東寺修造事業を優先させた。そして性我は、興然の協力を得ながら東寺講堂の仏像修復を主導した。

(カ) 走湯山は平安末に延暦寺の末寺となっていたが、源頼朝の挙兵に協力したことから、鎌倉幕府の直轄寺院(鎌倉殿御願寺)となつて延暦寺の支配から脱した。そして鎌倉時代の走湯山は関東御公事で造営された。

(キ) 走湯山は幕府成立期に鶴岡八幡宮や幕府祈禱体制を整備・構築する上で大きな役割を果たした。しかし、鎌倉の御願寺体制が整つてくると、走湯山の僧侶が鎌倉の仏事に招かれることが激減した。

(ク) 鎌倉前中期の走湯山は山門系の一和尚を貫首としていたが、鎌倉後期になると北条得宗が走湯山に別当職を置いてその任命権を掌握し、それに東密僧を任じることもあつた。

(ケ) 源頼朝は挙兵に協力した覚淵に走湯山密厳院を開創させた。独自の財源をもった密厳院は走湯山とは別組織として運営され、密厳院は一貫して東密僧によつて師資相承された。鎌倉幕府が滅亡すると、別当の宗派が山門派・寺門派・真言派と流動化する一方、足利氏の拠点であつた密厳院が走湯山全山を支配するようになった。

鎌倉幕府の宗教政策を解明するという最終目標からすれば、本稿が明らかにできたことは微少なものであるが、今後とも一歩ずつ着実に検討を進めてゆきたい。

## 注

(1) 拙稿「定豪と鎌倉幕府」(大阪大学文学部日本史研究室編『古代中世の社会と国家』清文堂、一九九八年)、同「鎌

- 倉中期における鎌倉真言派の僧侶―良瑜・光宝・実賢』（『待兼山論叢』史学篇四三、二〇〇九年）、同「鎌倉真言派と松殿法印―良基と静尊」（『京都学園大学 人間文化研究』三五号、二〇一五年）、同「熱田大宮司家の寛伝僧都と源頼朝―瀧山寺・日光山・高野大鐘」（『同』三八号、二〇一七年）
- (2) 「永福寺別当次第」（実相院文書二六箱一二六号）
- (3) 文覚について多くの論考があるが、とりあえず上横手雅敬『平家物語の虚構と真実』（講談社、一九七三年）、五味文彦『平家物語、史と説話』（平凡社、一九八七年）、山田昭全「僧文覚略年譜考」（『立教大学日本文学』一二、一九六三年）、同「文覚」（吉川弘文館、二〇一〇年）、同「文覚略年譜（増訂版）」（山田昭全著作集）五巻、おうふう、二〇一四年）などを参照。
- (4) 「文覚起請」（黒田俊雄編『訳注日本史料 寺院法』真六二号、集英社、二〇一五年、『平安遺文』四八九二号）
- (5) 『吾妻鏡』養和二年四月五日条・二十六日条
- (6) 『伝燈広録』（『統真言宗全書』三三巻四九四頁）、「勸修寺慈尊院次第」（『東寺宝菩提院三密藏聖教』一三五函）
- (7) 武内孝善「理明房興然伝攷」（『高野山大学論叢』一八、一九八三年）
- (8) 醍醐寺本『伝法灌頂師資相承血脉』（『醍醐寺文化財研究所研究紀要』一号、一九七八年）、『真言付法本朝血脉』（『統真言宗全書』二五巻一四頁）、東寺観智院金剛蔵『真言付法血脉図』（湯浅吉美翻刻、『成田山仏教文化研究所紀要』二九号、二〇〇六年）、『血脉類集記』（『真言宗全書』三九巻一五五頁）
- (9) 「高山寺明恵上人行状（漢文行状）」（『明恵上人資料』第一、九四頁）。「勸修寺流血脉」（『同』第二、一一三頁・一一三八頁）、「却温神呪経口伝」奥書（『高山寺経蔵典籍文書目録』第四部九一函二号一八、以下「高山寺目録」と略称）。また、前川健一「明恵の思想史的研究」三八頁・七一頁（法蔵館、二〇一二年）を参考されたい。
- (10) 『愚管抄』巻六（『日本古典文学大系』二七九頁）
- (11) 「永福寺別当次第」（『実相院文書』二六箱一二六号）
- (12) 『平家物語』巻五（『新日本古典文学大系』上二九〇頁）、『梁塵秘抄』（同、八五頁）

- (13) 『愚管抄』 卷六(日本古典文学大系、二七九頁)。文覚は伊豆に配流される際に「三十箇日断食」(「文覚起請」)を行ったし、藤原秀衡の調伏祈禱でも三七日の「断食」を行った(『吾妻鏡』 養和二年四月二十六日条)。
- (14) 『愚管抄』 卷六(日本古典文学大系、二七九頁)、『吾妻鏡』 文治二年正月三日条
- (15) 『玉葉』 養和元年八月一日条、十月二十七日条、『吾妻鏡』 養和元年八月十三日条。この時期の政治情勢については、河内祥輔『頼朝の時代』(平凡社、一九九〇年)、川合康『源平の内乱と公武政権』(吉川弘文館、二〇〇九年)を参考した。
- (16) 『玉葉』 寿永元年十一月十七日条
- (17) 『玉葉』 寿永二年九月二十五日条、十月一日条・二日条・四日条・八日条・九日条。十月宣旨については、佐藤進一「寿永二年十月の宣旨について」(同『日本中世史論集』 岩波書店、一九九〇年)、上横手雅敬「寿永二年十月宣旨」(同『日本中世政治史研究』 塙書房、一九七〇年)などを参照。
- (18) 塩原浩「三左衛門事件と一条家」(『立命館文学』 六二四号、二〇一二年)
- (19) 横山和弘「鎌倉幕府成立期の頼朝と護持僧性我」(『鎌倉遺文研究』 一三三号、二〇〇四年)、山田昭全「上覚・千覚と『玄玉集』の撰者」(「上覚・千覚と仁和寺と歌園」(『同著作集』 五巻)、同「千覚略伝」(同『文覚』) 年欠十一月三十日行慈書状(『鎌倉遺文』 三三三二六号)
- (20) 『愚管抄』 卷五(日本古典文学大系、二五二頁)
- (21) 「孔雀経法」奥書(『高山寺目録』 第四部一七二函三一五)
- (22) 尊実については、『法琳寺別当補任』(『統群書類従』 第四輯下、五五四頁)、『先徳略名口決』(同『第二八輯下、三七九頁)、『血脈類集記』(『真言宗全書』 三九卷一二〇頁・一二六頁・一五三頁)、醍醐寺本『伝法灌頂師資相承血脉』(『醍醐寺文化財研究所研究紀要』 一号、九四頁)、仁和寺本『真言伝法灌頂師資相承血脉』(『名古屋大学比較人文科学研究年報 仁和寺資料』 第四集、四九頁・五二頁)、『究竟僧綱任』(横内裕人『日本中世の仏教と東アジア』 塙書房、一六六頁)、『兵範記』 嘉応二年五月二十五日条、『玉葉』 承安二年正月七日条、安元二年十二月十八日条、治

承五年六月二十日条、『東寺長者補任』承安二年条(『続々群書類従』第二、五五四頁)を参照。『究竟僧綱任』の史料の性格については、拙稿「大伝法院座主職と高野紛争」(山岸常人編『歴史のなかの根来寺』勉誠出版、二〇一七年)で検討を加えた。

- (24) 『玉葉』元暦元年八月十八日条・二十一日条、『吾妻鏡』文治元年八月三十日条、九月三日条、十月二十四日条、文治二年正月八日条、「大仏頂如来放光悉怛他鉢怛囉陀羅尼」(『大随求陀羅尼經』奥書(『大日本史料』第四編一六、一九七頁)、「中論」奥書(『高山寺目錄』第二部八一三)
- (25) 『孔雀經音義』下卷奥書(『高山寺目錄』第一部三三三)
- (26) 横山和弘「鎌倉幕府成立期の頼朝と護持僧性我」(『鎌倉遺文研究』一三三)
- (27) 仁和寺蔵『真言伝法灌頂師資相承血脈』(『名古屋大学比較人文学研究年報 仁和寺資料』第四集、五一頁)、『東宝記』(『続々群書類従』第二一、一〇頁)
- (28) 源頼朝が征夷大將軍に任じられるのは一年後の建久三年七月であるが、便宜的に「將軍護持僧」と呼んでおく。
- (29) 拙稿「定豪と鎌倉幕府」(『古代中世の社会と国家』)、同「鎌倉山門派の成立と展開」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』四〇巻、二〇〇〇年)、同「鎌倉寺門派の成立と展開」(『同』四九巻、二〇〇九年)、「園城寺伝法血脈」五三行曉(『東京大学史料編纂所写真版』)
- (30) 年月日欠法助置文案(『鎌倉遺文』一五一四五号)
- (31) 年欠二月二十四日源頼朝書状(『鎌倉遺文』一〇二七号)
- (32) 仁和寺蔵『真言伝法灌頂師資相承血脈』(『名古屋大学比較人文学研究年報 仁和寺資料』第四集、五一頁)
- (33) 『神護寺略記』(高尾山神護寺文書集成『四三六頁』、後白河法皇神護寺御幸記(『同』三四号)、建久元年六月二十日太政官牒、建久元年十一月二十五日道法法親王阿闍梨解文、建久元年十二月二十五日太政官牒、建久二年三月十六日太政官牒、建久二年四月三十日太政官牒(『同』三六号、四〇号)
- (34) 建久三年八月二十七日守覚法親王御教書(『鎌倉遺文』六一三三)

- (35) 元弘二年二月十二日備中吉備津宮政所年貢送文(『鎌倉遺文』三一六七九号)、『吾妻鏡』建久四年十一月二十八日条、建久五年八月十九日条、建仁三年十月二十日紀伊国司庁宣(『鎌倉遺文』一三九三号)
- (36) 建久三年十一月五日東寺金堂柱損色注文(『鎌倉遺文』六三六号)、『玉葉』建久四年四月九日条・十二日条
- (37) 横山和弘「鎌倉幕府成立期の頼朝と護持僧性我」(『鎌倉遺文研究』一三三号)。ここで、佐々木馨氏の東国仏教独立論にコメントしておこう。頼朝の配下には、上総介広常に代表されるような東国国家独立派と、文覚に代表されるような朝廷との協調派の二派が存した。東国国家独立の方向性からすれば、頼朝が鎌倉に独自の戒壇を設立して、東国仏教界を自立させる可能性も皆無ではなかった。とはいえ、頼朝にとつて重要なのは、何よりも東国の軍事的統一であつて、仏教政策は二の次であつた。頼朝が東国支配を安定させることができたのは、寿永二年(一一八三)二月の志田義広・藤姓足利氏の反乱を鎮圧してからであり、十月宣旨の八ヶ月前に過ぎない。となれば、戒壇独立の可能性は、寿永二年二月から十月までしかなかった。しかし東国戒壇の設立は、顕密仏教界との全面対決を覚悟しなければならず、朝廷の反発も必至である。この時点での戒壇独立は頼朝の政治的選択肢を狭める危険性が高く、そのため政治課題として浮上することがなかった。また、内乱終結後は、頼朝は東大寺・東寺・金剛峯寺など顕密寺院の再建に積極的に関与しており、東国国家独立や戒壇独立はもはや政治目標とはなり得ない。結局、東国での戒壇独立や東国仏教の自立は、頼朝の政治課題とはならなかったのである。
- (38) 『吾妻鏡』寿永元年九月二十日条・二十三日条、『日光山列祖伝』(『栃木県史 史料編中世四』)、拙稿「熱田大宮司家の寛伝僧都と源頼朝」(『京都学園大学 人間文化研究』三八号)
- (39) 『吾妻鏡』養和二年四月五日条
- (40) 「真言付法血脈図」(『成田山仏教研究所紀要』二九号、湯浅吉美翻刻)
- (41) 東寺観智院金剛藏聖教「具支日記(応長元五月)」(佐藤愛弓『中世真言僧の言説と歴史認識』二〇一頁、勉誠出版、二〇一五年)
- (42) 「永福寺別当次第」(実相院文書、二六箱一二六号)

- (43) 『吾妻鏡』 文治五年十二月九日条、建久二年二月十五日条、建久三年六月十三日条、十一月二十五日条
- (44) 建久二年十二月十一日源頼朝御教書案(『鎌倉遺文』五六七号)
- (45) 『吾妻鏡』 文治元年九月三日条、十月二十四日条
- (46) 本主的門首については拙稿「青蓮院の門跡相論と鎌倉幕府」(『延暦寺と中世社会』法蔵館、二〇〇四年)、慈円・隆海・定豪についてはそれぞれ、拙著『鎌倉仏教と専修念仏』四一八頁(法蔵館、二〇一七年)、拙稿「大伝法院座主職と高野紛争」(『歴史のなかの根来寺』)、同「定豪と鎌倉幕府」(『古代中世の社会と国家』)を参照。顕密仏教界における本主のこうした在り方は、院と天皇、大殿と摂政・将軍との関係に近似している。
- (47) 『吾妻鏡』 文治二年正月八日条、建久二年九月三日条、建久三年四月四日条、四月二十八日条、建久五年閏八月八日条
- (48) 『吾妻鏡』 建久四年三月十三日条
- (49) 根立研介『運慶』九九頁(ミネルヴァ書房、二〇〇九年)、新見康子『東寺宝物の成立過程の研究』四三〇頁(思文閣出版、二〇〇八年)
- (50) 『真言付法血脈図』(『成田山仏教研究所紀要』二九号、湯浅吉美翻刻)、『真言付法本朝血脈図』(『続真言宗全書』二五卷一五頁)、「転法輪菩薩摧魔怨敵法」奥書(『高山寺目録』第四部一一五函二九)、「後七日私記(仁平三年)」奥書(『同』第一部一三五函)
- (51) 『神護寺略記』(『高尾山神護寺文書集成』四四八頁)。ただし『神護寺略記』は二天像を建久七年に中門に安置されたとするが、『東宝記』(『続々群書類従』第一二、七頁)と『覚禅鈔』(『大日本仏教全書』第五〇卷二二二頁)は建久九年で東門とする。
- (52) 特別展図録『運慶』(神奈川県立金沢文庫、二〇一一年)、『東宝記』(『続々群書類従』第一二、一五頁)
- (53) 『東宝記』(『続々群書類従』第一二、一二頁)。なお『東宝記』の記事については、『国宝東宝記原本影印』(東京美術、一九八二年)で確認した。

- (54) 横山和弘「鎌倉幕府成立期の頼朝と護持僧性我」(『鎌倉遺文研究』一三三号)。「性我の記録を『東宝記』は「性我阿闍梨記」と呼び、①「東寺講堂御仏所被龍御舍利員数」は「専覺房阿闍梨〈性我〉」の「端日記」と記している。
- (55) 一九九四年に東寺講堂の金剛宝菩薩像の頭部にX線透過撮影を行ったところ、仏舍利を納めた筒が確認されている。これら東寺講堂の二一仏については、新見康子『東寺宝物の成立過程の研究』五二頁を参照。
- (56) 『東寺長者補任』建久九年条は「文覚流罪、諸尊奉、動故歎」とし、『同』元久二年条でも、奉行藤原長房が「講堂の仏像を戻す時に文覚らが配置を間違ったのではないか」と調査に入り、それが誤解であったことが分かったという(『続々群書類従』第二、五六六頁・五六九頁)。
- (57) 『吾妻鏡』正治元年五月十七日条、正治二年三月二十九日条
- (58) 『伊呂波字類抄』(『校刊美術史料 寺院編』上、一八六頁)、『相模集』(『新編国歌大観』第三卷三五五頁・八九六頁)、『新猿楽記』(『日本思想大系』『古代政治社会思想』一四八頁)、『梁塵秘抄』(『新日本古典文学大系』八八頁)、伊豆山神社出土経筒銘(『平安遺文 金石文編』一八九号)。走湯山については、貫達人「伊豆山神社の歴史」(『三浦古文化』三〇号、一九八一年)、鷲塚泰光「伊豆山神社木造男神立像考」(『同』三〇号)、安藤孝一「伊豆山神社の経塚」(『同』三〇号)、『静岡県史 通史編』一、二などを参照。
- (59) 『走湯山縁起』(『群書類従』第二輯三二五頁)。同縁起の成立時期については、鴨志田美香「『走湯山縁起』について」(『昭和女子大学生活機構研究紀要』七、一九九八年)を参照。
- (60) 『吾妻鏡』治承四年八月十八日条、念仏往生伝(『日本思想大系』『往生伝 法華験記』七〇六頁)
- (61) 元徳三年十月十一日日興讓状(『鎌倉遺文』三一五二〇号)
- (62) 『走湯山縁起』(『群書類従』第二輯三二二頁)
- (63) 田辺旬「鎌倉幕府二所詣の歴史的展開」(『ヒストリア』一九六号、二〇〇五年)、同「鎌倉幕府の二所詣と箱根山」(特別展図録『二所詣 箱根神社、二〇〇七年』)。このほか、『静岡県史 通史編』二一一八七頁(永村眞氏執筆、一九九七年)、岡田清一「鎌倉幕府と二所詣」(同『鎌倉幕府と東国』続群書類従完成会、二〇〇六年)、菊地晋介「鎌倉



初期の走湯山と二所詣」（『神道宗教』二二五、二〇一二年）、関口崇史「摂家将軍期における二所詣」（阿部猛編『中世政治史の研究』日本史史料研究会、二〇一〇年）、矢田美保子「二所詣の参詣形態から探る鎌倉幕府における将軍と執権の攻防」（『歴史民俗資料科学研究』一八、二〇一三年）を参照。なお、『吾妻鏡』建仁四年正月十八日条は「鶴岡別当阿闍梨尊暁、為<sub>二</sub>将軍家御祈禱<sub>一</sub>、進<sub>二</sub>発<sub>二</sub>所<sub>一</sub>、江馬四郎主為<sub>二</sub>奉幣御使<sub>一</sub>、同参給」とあり、この記事から尊暁と北条義時をこの時の奉幣使と解する研究が多い。しかし、記事にあるように、奉幣使はあくまで北条義時であり、鶴岡別当尊暁は二所で将軍祈禱を行うために同時派遣の形となっただけである。『吾妻鏡』嘉禎四年正月九日条でも、九条頼経が二所詣に出発した際に、経供養の導師として隆弁を伴っている。幣帛を捧げる二所詣と、二所での仏教祈禱を混同すべきではない。

(64) 『吾妻鏡』仁治元年七月二十六日条、正嘉二年三月一日条、文応元年十一月二十七日条

(65) 『吾妻鏡』安貞二年七月十七日条

(66) 貞永元年七月十日幕府評定衆連署起請文（『鎌倉遺文』四三四一号）

(67) 「走湯山上下諸堂目安」（『東京大学史料編纂所謄写本』、『吾妻鏡』承久元年九月八日条、嘉祿二年十二月二十九日条、安貞二年二月三日条、『見聞私記』（『群書類従』第三〇輯上、七六頁）、続史料大成『武家年代記裏書』永仁三年三月八日条

(68) 嘉元四年九月七日関東下知状（『鎌倉遺文』二二七二三号）、弘安二年五月九日六波羅御教書案（『同』一三五八六号）、永仁六年十月十日播磨大部莊百姓等申状案（『同』一九八四八号）、文保元年九月十二日（『同』二六三六四号）、岡田清一「鎌倉幕府と伊豆走湯山」（『鎌倉』五九号、一九八九年）。関東御公事については、安田元久「関東御公事」考（『御家人制の研究』吉川弘文館、一九八一年）、清水亮「鎌倉幕府御家人役賦課制度の展開と『関東御領』」（『同』鎌倉幕府御家人制の政治史的研究）校倉書房、二〇〇七年）を参照。特に、走湯山が鶴岡八幡宮・勝長寿院・永福寺・大慈寺・六条八幡宮とともに御家人役によって造営されたことについては、七海雅人「鎌倉幕府御家人制の展開」二〇三頁（吉川弘文館、二〇〇一年）を参照。

(69) 『吾妻鏡』 文治三年七月二十七日条。「走湯山上下諸堂目安」(『東京大学史料編纂所謄写本』)によれば、走湯山の再建は「伊豆大尼御分トシテ御造進<sup>(マ)</sup>被也、承久元年二位家御分、安貞二年竹御所御分」とある。残念ながら「伊豆大尼」が誰なのか、特定することができないが、これらの記事によれば、北条政子や竹御所らが走湯山造営の責任者となり、源延が「御代官」の「勸進上人」となって造進したことになる。これまで、北条政子と竹御所の二所詣が注目されてきたが、それは走湯山造営における二人の役割を併せ考慮したうえで、論じる必要があるだろう。走湯山と二人との関係は、御台所としてよりは、源氏將軍家の後継者として捉えるのが適切である。田辺旬「鎌倉幕府二所詣の歴史的展開」(『ヒストリア』一九六号)および金永「摂家將軍期における源氏將軍親と北条氏」(『同』一七四号、二〇〇一年)を参照。

(70) 『吾妻鏡』 治承四年十月十二日条、養和元年十月六日条、建久四年二月七日条

(71) 『吾妻鏡』 治承五年八月二十九日条、文治三年四月二日条、建久二年正月八日条

(72) 『吾妻鏡』 建久三年五月八日条

(73) 「鶴岡八幡宮一切経并両界曼荼羅供養記案」(『鎌倉市史 史料編一』六一号)、『吾妻鏡』承久三年五月二十六日条、弘長元年二月二十日条

(74) 「走湯山上下諸堂目安」(『東京大学史料編纂所謄写本』)

(75) 『吾妻鏡』 治承四年七月五日条、八月十七日条、伊豆密厳院別当職管領文書(『大日本古文書 醍醐寺文書』二九四号、以下「醍醐寺文書」と略記)

(76) 伊豆密厳院寺領目録(『醍醐寺文書』二九三七号)。相田二郎「伊豆走湯山領相模国柳下郷に関する古文書」(『歴史地理』八二一二、一九四三年)を参照。

(77) 嘉祿三年二月十二日藤原頼経袖判下文(『鎌倉遺文』三五七一号)、寛元元年五月二十八日後醍醐天皇綸旨案(『醍醐寺文書』一七八六号)

(78) 伊豆密厳院別当職管領文書(『醍醐寺文書』二九四一号)。こゝで密厳院別当覚意について触れておこう。「伊豆国密

敕院院務次第」にみえる「覚意（越後僧都、東寺）」については、嘉禄三年（一二二七）の將軍九条頼經袖判下文（『鎌倉遺文』三五七一号）で、「法眼覚与」から「越後房覚意」への密敕院相承が安堵されているが、これ以外に覚意の記事を確認することができない。ところが『血脈類集記』に、足利泰氏の子である覚玄・覚海に伝法灌頂を授けた覚位兵部卿法印という僧侶が登場する（『真言宗全書』三九卷一七六頁・一八四頁・二三八頁・二五九頁）。密敕院別当職は覚意―覚玄―覚海と相承されているので、覚意と覚位は同一人物とみてよからう。そこでその経歴をまとめると、次のようになる。覚位（覚意、一一八二―？）の出身は不明。公名は越後と兵部卿。承元三年（一一〇九）、建暦三年（一二一三）に仁和寺大聖院で聖教を書写し（『神奈川県史 資料編』一―四六一号・五〇九号）、建保四年（一二一六）に蓮頭より伝法灌頂をうけた。その後、鎌倉に移って嘉禄三年に覚誓（覚与）から密敕院を譲られ、寛元元年（一二二四）には後嵯峨天皇より一國平均役を免除する綸旨を得た（『醍醐寺文書』一七八六号）。寛元三年五月、六月に道慶大僧正を中壇として九条頼經・將軍頼嗣のための五壇法が行われたが、覚位はそこで金剛夜叉法を勤修している（『五壇法日記』〈『続群書類従』第二六輯上、九〇頁〉）。正嘉二年（一二五八）の勝長寿院供養に請定され、職衆三十口の一に「権少僧都覚位」と見えるし（『吾妻鏡』同年六月四日条）、弘長元年（一二六一）の辛酉御祈では八字文殊護摩を修した。建長三年（一二五一）に定祐三河阿闍梨に鎌倉二階堂勝福寺で伝法灌頂を授けたのをはじめとして、康元元年（一二五六）には覚玄大夫律師に、弘長三年には覚海右馬頭阿闍梨、善覚卿阿闍梨に伝法灌頂を授けている。密敕院別当覚兼については注(81)を参照されたい。

- (79) 『太平記』 卷一〇（日本古典文学大系、一―三一―一九頁）、元弘三年九月十四日足利尊氏御判御教書写（『静岡県史料編』六一―一五号）、建武四年七月四日足利尊氏御教書案（『醍醐寺文書』三六九六号）、『尊卑分脈』第三篇二六三頁。顕潤は、元弘三年（一二三三）九月に密敕院別当に補任されて以後の事蹟が不明である。具海は内大臣中院通顕の息と思われるが、「内供」と記されているだけなので、若年で別当に就任して早世したとみるべきだろう。顕潤については、拙稿「鎌倉山門派の成立と展開」（『大阪大学大学院文学研究科紀要』四〇巻）を参照。

- (80) 貞和二年隆舜上洛人馬注文（『醍醐寺文書』二九三五号）、伊豆密敕院別当職管領文書（『同』二九四一号）、伊豆密敕

院別当職文書案(『同』二九四四号)、応永二十四年九月日伊豆密厳院雜掌榮快申状案(『同』二九四六号)、伊豆密厳院別当職文書案(『同』三二九二号)、年月日欠隆源置文土代(『同』三六九六号)、応永六年九月五日鎌倉方足利滿兼書状(『静岡県史 資料編』五―一二四六号)、「園城寺伝法血脈」一三四乗基(東京大学史料編纂所写真版)、『鶴岡八幡宮寺社務職次第』(『神道大系 神社編二〇 鶴岡』一五二頁)、『系図纂要』三卷一六七頁も隆舜を「走湯山別当」とする。なお、永村眞「醍醐寺報恩院と走湯山密厳院」(『静岡県史研究』六号、一九九〇年)は、南北朝・室町時代に醍醐寺報恩院院主に数多く発給された密厳院別当職補任状には実効性がなく、実際に走湯山経営に関与したのは隆舜だけであったことを明らかにした。ただし永村氏は乗基については、不明としている。また、『醍醐寺文書』三二九二号は「一心院僧正」を「隆舜力」とするが、これは乗基の誤りである。

(81) 密厳院別当は覚玄から顕潤まで足利一門で相承されたが、唯一の例外が覚兼である。覚海から密厳院を相承した覚兼について、「伊豆国密厳院院務次第」は「大納言、東寺、安野法印、四条」と記しているが、これ以外に関連資料が確認できない。ところが、『血脈類集記』によれば、弘安十年(一二八七)に覚海が覚典なる人物に伝法灌頂を授けており、その覚典を「大納言、権律師、冷泉三位顕茂息」と記す。ここに登場する冷泉顕茂は四条(冷泉)隆房の玄孫であり、従三位冷泉顕成(？)―一二九六の子である。しかも『贈僧正有範発心求法縁起』によれば、嘉元三年(一二三〇五)に有範は、走湯山の妙静上人有祥から「密厳院別当阿野覚典僧正」に密教を初歩から教授するよう命じられている。以上からすれば、覚兼と覚典は同一人物であり、「覚兼」は「覚典」の誤記である可能性が高い。大納言の公名についていうと、彼の一族には四条隆衡・隆行や隆親・隆顕・房名など大納言の経験者が豊富なので、覚典は彼らの猶子になったと考えられる。とはいえ、足利一門による密厳院相承に割り込むには、かなり強力な俗縁が必要となる。そこで注目すべきは、覚典らの四条家から隆弁(一二〇八―八三、隆房の子)が出ていることである。宝治合戦で北条時頼の絶大な信頼を獲得した隆弁は終身の鶴岡八幡宮別当となり、「隆弁の時代」といってよいほど東国仏教界で大きな力を振るった。恐らく覚典は隆弁の後押しによって、覚海の補処になったのであろう(『血脈類集記』(『真言宗全書』三九卷二七一頁)、『尊卑分脈』第二篇三六五頁、『贈僧正有範発心求法縁起』(『大日本史料』第六編一六、

- 六三三頁）。なお、妙静上人有祥については、楠田良洪「伊豆教学の勃興」（同『真言密教成立過程の研究』山喜房仏書林、一九六四年）を、隆弁については拙稿「鎌倉仏教の成立と展開」（同『鎌倉仏教と専修念仏』を参照されたい）。
- (82) 『洪川系図』（『続群書類従』第五輯上、四二〇頁）、伊豆国密厳院院務次第」（『醍醐寺文書』二九四一号）
- (83) 『吾妻鏡』治承四年十月十一日条・十二日条、寿永元年八月十二日条、文治元年八月二十日条・三十日条、九月三日条、文治五年七月十八日条、八月八日条、建久三年十二月十一日条・二十九日条、『源威集』（平凡社東洋文庫、一八六頁）。なお、『吾妻鏡』文治四年二月二十三日条および同三月二日条によれば、「専光房覚淵」が、瘧病を患った源範頼を加持したところ、その「効驗」によって忽ち平癒し、頼朝がそれをたたえて「専光房」に馬を贈ったという。しかし、「専光房」は良暹の房号であり、覚淵は文陽房であるため、「専光房覚淵」なる記載はありえない。ここにみえる「専光房覚淵」が良暹を指すのか、それとも覚淵のことなのか、判断がむずかしいが、内乱後に頼朝から鎌倉に呼ばれたのは、良暹が圧倒的に多い。そのことからして、「専光房覚淵」は「専光房良暹」の誤記と考えておきたい。なお、加藤功「伊豆走湯山良暹と鶴岡別当職」（『政治経済史学』一〇〇号、一九七四年）を参照。
- (84) 源延については、納富常天「三浦義村の迎講と伊豆山源延」（同『金沢文庫資料の研究』法蔵館、一九八二年）、三田全信「伊豆山源延とその浄土教」（同『浄土宗史の新研究』隆文館、一九七一年）、菊地勇次郎「伊豆山の浄蓮房源延」（『伊豆山の浄蓮房源延補考』（同『源空とその門下』法蔵館、一九八五年）、加藤有雄「源延資料の追跡」（『金沢文庫研究』一八卷一二号、一九七二年）を参照。源延が加藤景員の子であることは、網野善彦氏が紹介した「加藤遠山系図」によって確定した（同「加藤遠山系図」について）（『小川信編『中世古文書の世界』吉川弘文館、一九九一年）。なお先行研究では触れられていないが、源延は台密だけでなく、醍醐三宝院成賢より小野流を重受している）。
- (85) 『遍智院僧正入壇資』（『続群書類従』第二六輯上、四〇二頁）。
- (86) 『吾妻鏡』建暦三年三月二十三日条、貞応三年六月二十二日条、八月八日条、安貞三年二月二十一日条
- (87) 『走湯山上下諸堂目安』（東京大学史料編纂所謄写本）、『吾妻鏡』安貞三年二月十一日条
- (87) 『吾妻鏡』建久四年三月十三日条。今のところ、この記事が良暹に関する最下限の事蹟である。なお、宿老一〇名

のうち、賢祐については遠藤巖「平泉惣別当譜考」(『国史談話会雑誌』一七号、一九七四年)を参照。このほか、義慶は鶴岡八幡宮供僧一和尚であり、求仏房惠契は後述するように、安居院澄憲の真弟であり、慈円の弟子である。残念ながら、慈仁法眼については経歴が判明しなかった。

- (88) 『吾妻鏡』寛元二年正月十一日条で、白虹貫日のための祈禱として「伊豆・箱根(已上本地供、各別当參籠、供料為三政所沙汰可下行云々)」とあるのが、鎌倉前中期に走湯山別当に触れた唯一の史料である。これは、箱根山別当に引きずられて「各別当」と一括されたと思われる。

- (89) 『吾妻鏡』治承四年八月二十四日条、治承五年三月一日条、建久四年六月十八日条、延応元年三月二十九日条

- (90) 『吾妻鏡』治承四年十月十一日条、文治五年七月十八日条、建久三年十二月十一日条

- (91) 『沙石集』一〇本一(日本古典文学大系、三九六頁)

- (92) 『鎌倉遺文』一六五九号。なお、『訳注日本史料 寺院法』五四七頁を参照。

- (93) 康永三年(一三四四)に聖覚の子孫である憲守と、青蓮院との間で「山門東塔南谷校本房同坊領」をめぐって相論しており(『大日本史料』第六編八、一五二頁)、これが「桜下門跡」であろう。坊領をめぐって本家・領家間相論が行われていることは、桜下門跡領が、なおある程度の実体があったことを物語っている。桜下門跡の創始者は源恵である。元永二年(一一一九)待賢門院の御座(崇徳天皇誕生)祈禱を記した『中宮御産部類記』によれば、請僧の一人に「源恵(桜下阿闍梨)」と見え(『群書類従』第二九輯六四九頁)、『尊卑分脈』第二篇一二〇頁は源恵を「山、法性寺座主、号桜法印」と記している。以上からして、源恵の門流を桜下門跡と呼んだと思われる。この源恵は、白河院の近臣として著名な藤原為房(一〇四九―一一一五)の子で、兄弟には葉室顕隆や藤原為隆・重隆・朝隆・親隆などがある。初代の青蓮院門首である行玄が、保延四年(一一三八)に天台座主として拜堂登山した時には、「源恵律師」が祿物を受ける役をしているし(『門葉記』卷一八四(『大正新脩大藏經 圖像部』第二二卷六六八頁)、『法性寺座主次第』によれば、「源恵(律師越三七人、為房子、保延四十二十九)」とある(『門葉記』卷一四六(『同』第一二卷三九二頁))。行玄の後任として七人を超越して保延四年(一一三八)に法性寺座主に任じられており、源恵は青蓮院の門徒と

考えてよいだろう。源恵の桜下門跡は、藤原為房およびその子弟の政治力を背景に、多数の末寺莊園を擁する門跡に成長したが、源恵自身は永治二年（一一四二）四月に死没している（『本朝世紀』永治二年四月二十一日条）。

〔94〕 天福二年八月日青蓮院慈源所領注文（『鎌倉遺文』四六八七号）

〔95〕 求仏房については、「師資相承血脈」乾四七紙（慈円の項、東京大学史料編纂所蔵、四一一六一三〇）、『尊卑分脈』第二篇四九三頁、『門葉記』卷二二八（大正新脩太藏經 圖像部 第二卷二四〇頁）、『吾妻鏡』建久四年三月十三日条、嘉禄二年六月十三日条、寛喜三年七月十一日条などを参照。

〔96〕 『善光寺縁起』（『続群書類従』第二八輯上、一八七頁）、『走湯山上下諸堂目安』（東京大学史料編纂所謄写本）、三田全信「伊豆山源延とその浄土教」（同『浄土宗史の新研究』）

〔97〕 角川源義『語り物文芸の発生』二二一頁・四六九頁（東京堂出版、一九七五年）

〔98〕 『野沢血脈集』（『真言宗全書』三九卷三八九頁）、『密宗血脈鈔』（『続真言宗全書』二五卷三六四頁）。なお、『静岡県史 通史編』二一九八頁は、「伊豆別当職」を密厳院別当職と解しているが、賛成できない。

〔追記〕 本稿は平成二十九年度科学研究費助成「鎌倉真言派の基礎的研究に基づく鎌倉幕府像の再構築」（課題番号二六三七〇七六五）の研究成果の一部である。史料蒐集では東京大学史料編纂所伴瀬明美氏のお世話になった。成稿に際しては田辺旬氏より助言をいただいた。あつく感謝したい。

